

アイルランド演劇を掘り起こす(2)

——サム・トムプソン『橋を越えて』——

河野賢司

だれもその容姿を、その才能を、民族を、地位を、教育を、祖国を嘆くことはございませぬし、アイルランド人はイタリア人と…替わりたいとは願わないほどなのでございます。(エラスムス『痴愚礼讃』)¹⁾

(I) 劇作家略歴

サム・トムプソン(Sam Thompson, 1916-65)は、1916年5月21日²⁾、北アイルランド・ベルファースト東部にあるプロテスタント労働者階級地区バリーマキャレット³⁾(Ballymacarret)のモントロウズ通り(Montrose Street)2番地に、点灯夫(lamp-lighter)の父親の7番目の子として生まれた。一家の家計は苦しく、父親は昼間、聖クレメント教会で雑用係の副業も務めていた。(母親については不詳。テキストのメアリアンの母のように、夭折したのかもしれない。)サムは地元の学校を出た後、4人の兄たちと同様に、14歳で地元のハーランド・アンド・ウルフ(Harland and Wolff)造船所で塗装工見習いとして就労する。高等教育の機会には恵まれなかったものの、世情不安な1939年にはパリで開かれた全国労働大学振興会(N.C.L.C.: National Council of Labour Colleges)の夏期講習にも参加し、社会主義理論も勉強している。第2次大戦後はベルファースト市に勤務するが、労組の職場委員に着任し、アルバート橋裏側の塗装作業の全員平等な輪番制を提唱したことが発端となって解雇される。1947年、31歳でメイ(May)と結婚後、妻の実家に近いCraigmore Streetに転居する。ここはたまたまBBC北アイルランド放送局横手のBedford Streetに近く、馴染みのパブ「ゆとり」(Elbow Room⁴⁾)はマスコミ関係者や劇団員たちの行きつけの店であった。ここで、1955年ごろ、小説家でBBC北アイルランド局プロデューサーのサム・ベル(Sam Hanna Bell, 1909-90)と巡り合い、君の饒舌を文章化してみないか、と励ましの誘いを受けたのが機縁で、『手には刷毛』(*Brush in Hand*, 1956)、『職場委員トミー・バクスター』(*Tommy Baxter — Shop Steward*, 1957)、『総主任』(*The General Foreman*, 1958)など波止場の徒弟の労働問題を題材とするラジオ・ドラマや芝居を書き始める。1955年から57年にかけては、拙論で取り上げる『橋を越えて』(*Over the Bridge*, 1960)の執筆に専念し、これがトムプソンの代表作となる。

『橋を越えて』に続く第2作の『福音伝道者』(*The Evangelist*, 1961: 63年7月3日ベルファースト・オペラ・ハウス初演、ヒルトン・エドワーズ演出)は、『橋を越えて』

に描かれた宗教問題をさらに追及したもので、勿体をつけた偽善者アールズ牧師(Pastor Earls)を槍玉に挙げて、彼が代表する偽りの商業宗教に対峙する不可知論者をトムプソン自身が演じた。第3作『愛に塗り固められて』(*Cemented with Love*, 1965)は、ドラムトリー選挙区の選挙不正や政治の腐敗を描くテレビ・ドラマ(1965年4月放映;その後1967年ダブリン演劇祭で舞台化)である。

61年9月に体重オーバーがもとで最初の心臓発作に見舞われたトムプソンは、翌年にも再発、しかし64年にはサウス・ダウン州から労働党の候補者として(勝算はもととなかったが)出馬して選挙活動に奔走、65年2月15日北アイルランド労働党の事務所で息を引き取った。まだ38歳の若さだった。先述の『愛に塗り固められて』はこうした政治活動の影響もあったのか、64年9月放映予定が2度も延期となり、『橋を越えて』の検閲騒動の再現を思わせたが、劇作家の死後2ヶ月が経って放映された。遺作として、ロンドンの地下室を舞台に、コール・ガールとナチス狂いの精神病凶悪犯、その筆耕の3人が織り成す実験劇『仮面舞踏会』(*The Masquerade*)の初稿がほぼ完成稿で残された(未上演)。

(II) 上演までの経緯

『橋を越えて』は、北アイルランドの造船所における宗派对立という一触即発の主題を扱い、「舟竿(barge pole)を使っても触れたくないような芝居」とトムプソン自身も危ぶんでいたが、アルスター・グループ劇団(UGT: The Ulster Group Theatre, 1940-60)の新進気鋭の名優・演出家ジェイムズ・エリス(James Ellis, 1931-)がこの脚本の上演を57年に引き受け、59年4月6日、アルスター・ホールでの記者会見の席で、今後上演予定の新作戯曲4本について発表し、『橋を越えて』は2番目であると発表した。(ちなみに4番目は、翌年に教職を辞して執筆活動に入るブライアン・フリール[Brian Friel, 1929-]の『フランス虜囚』[*The Francophile*]で1960年8月上演。不評でフリールにとっては「忘れ去りたい作品」に終わった。)座席数150の小劇場を本拠とし、経営基盤が脆弱なUGTにとって、地元出身の劇作家の新作上演は興行上も必要であり、とりわけトムプソンに関しては「実体験をもとに書き上げた作家」として、エリスは大きな期待を寄せていた。

ところが、このあとでUGTの理事たちが上演に反対するという思わぬ事態が生じた。とりわけ劇団理事会トップのリッチー・マキー(J. Ritchie McKee)は、BBC北アイルランドの理事も兼任し、北アイルランド最大の不動産仲買業者の資産家で、芸術振興の政府機関CEMA(Council for the Encouragement of Music and the Arts, 現在のACGB)会長の要職(わが国の文化庁長官クラスか)にもあった重要人物で、台本の事

前閲覧をエリスに拒否された彼は、どうにかして台本を入手し(稽古場から盗まれたという噂もある)、他の理事たちとも協議の末、かなりの手直しを加えない限り上演は延期する、と宣言した。

もちろん、トムプソンは改稿要求に応じず、マキー邸で開かれた三者会談(理事長マキー、劇作家トムプソン、演出家エリー)も決裂した。特別理事会が招集され、『橋を越えて』の上演見送り動議が提出され、6対2で可決された(エリスは反対票を投じた)。マキーはこれに先立つ2週間前にも、アイルランドの名女優シヴォーン・マッケナ(Siobhan McKenna, 1923-86)のIRA擁護発言のあるテレビ・インタビュー番組の放映に待ったをかけるなど、政治的検閲の姿勢を明確に打ち出していた。

こうして、この芝居はリハーサル段階で頓挫し、契約違反だと訴えたトムプソンは結果的には勝訴したものの、上演話が持ち上がってから3年が経過した1960年まで初演が持ち越されることとなった。しかも、当初のアルスター・グループ劇団は経営不振と『橋の向こうで』上演をめぐる確執で分裂して1960年に解散しており、その劇団員を中心に別の劇団を立ち上げての公演となった。なお、初演リストによれば、トムプソン自身も偏狭なプロテスタントの登場人物アーチャー・カーの役で舞台に上がっている。写真で見るトムプソンの外貌は、がっしりした中肉中背、くやや痩せ型のブレンダン・ピーアン< >といった印象の人物である。

『橋を越えて』初演は1960年1月26日、ベルファーストのエムパイア劇場(19世紀後半の建造物だったが、すでに取り壊されているらしい⁵⁾)において、ジェイムズ・エリス演出(彼も、暴徒たちのリーダーの男の役でも登場している)、アルスター・ブリッジ・プロダクションズによって6週間の公演がなされ、自主規制的検閲騒動の影響で、この劇場には、のべ4万2千人の観客がつめかける大盛況だったという。(この観客たちは、トムプソンが属する労働者階級の人々が多かったのか、それともメディアに敏感に反応しただけの中産階級の人々が多かったのか。後者だと批判する者⁶⁾もある。)その後ダブリン、グラスゴウ、エディンバラ、ブライトン、ロンドンなどを1週間ほどずつ巡回している。本論の(IV)-(8)で紹介するように、ベルファーストやダブリン公演の劇評は好意的だったものの、ロンドンでは酷評を受けている。1969—70年、85年、90年11—12月にリヴァイヴアル公演がなされ、最近では2003年3月15日、ポータダウン演劇祭(Portadown Drama Festival)でアマチュア劇団Omagh Playersによって上演されている。

(III) 作品梗概

○戯曲構成 (曜日や時間はテキストからの筆者の推定による)

第1部	第1場	月曜の午前遅く	造船所内の主任室
	第2場	月曜の昼食時間	造船所内の工場裏の空地
	第3場	月曜の夕方	デイヴィの自宅
第2部	第1場	火曜の午前遅くから昼食時間	造船所内の主任室
	第2場	木曜の午後早く	デイヴィの自宅 (台所)

第1部。第1場。ペルファーストの造船所内の職場主任⁷⁾室。ラビー・ホワイト (Rabbie White) は、賛美歌を口ずさみながらサッカー籤に記入している。職場委員を務める青年ウォーレン・バクスター (Waren Baxter) が登場。職場主任のフォックス (Mr Fox) に声をかけたが、主任室で待つように言われたという。組合の用件を工場内で切り出そうとする若いバクスターの無思慮に苦言を呈した後、ラビーはいまではサッカー籤くらいが人生の楽しみだと、応募籤と為替を封筒に入れる。主任が現れるまでの間、2人はこの日の昼休み時間⁸⁾に開催予定の非公式な組合会合の件を語る。宗派対立でプロテスタント組合員カー (Archie Kerr) とカトリック組合員オボイル (Peter O'Boyle) がいがみあっており、明晩開催予定の正式な支部会議の前に、両者に言いたいだけ言わせて〈ガス抜き〉 (safety valve[22]) をさせ、事態の悪化を未然に防ごうというのが狙いで、70歳近い古参のデイヴィ (Davy Mitchell) が提唱したのである。デイヴィにはジョージ (George Mitchell) という弟がいるが、同腹とは思えないほど性格が異なり、デイヴィの一人娘メアリアン (Marian Mitchell) と交際中のバクスターがもし結婚すれば、いやな奴と縁続きになってしまうな、とラビーは同情する。主任の到着の気配を直感的に察したラビーは、図面作業台に向かい、仕事に精を出している振りを咄嗟に装うが、バクスターは雑談に夢中で、フォックス主任が登場すると戸惑う。

フォックスは、半年後の「海上試運転施行日」 (trial dates[25]) も決定している3隻を建造するプログラムの遂行のために、従業員一同がチーム・ワークで頑張ってもらいたい、と話し出す。しかし、バクスターが職場委員として昨夜の地区委員会での決定事項の報告——全組合員の雇用が確保されるまで、超過勤務の全面禁止——を主任に伝えると、怒り出す。なぜなら、つい2週間前にフォックスは組合員の全員就労を果たしたはずだからである。ラビーがすかさず補足説明し、その後先週になって50人が一時解雇される新たな事態が起きたこと、明日の労使交渉で事態が打開されなければ来週から超勤禁止が実施される旨を伝える。新規追加雇用する権限は自分にはないとしてフォックスは明言を避ける。ラビーはフォックスの留守中、タンカーの担当者バンクス (Mr Banks) から機関室作業の遅れに関する電話伝言があったことを知らせ、細かな専門的説明を行なうが、フォックスは彼に一任する。別の建造中の船舶グレンキル (Glenkill) 号に関しても、工事の遅れに苦情が出ているとして、フォックスは現場従業員のジョージを呼びにやらせる。(さらに3隻目のタンカーも、2つの組

合間の〈管轄争議⁹⁾〉(demarcation dispute[27])の影響で作業が停止している。)出頭したジョージに、フォックスは(超勤禁止が実施前の)今週中に超過勤務を打診するが、すでに〈月30時間〉の制限枠に達している、とラビーが指摘する。作業遅延の理由を問うフォックスに、ジョージは言葉を濁しながらも、若い同僚ベル(Ned Bell)が超勤はしないし、有休ばかりとるからだ、と説明、フォックスはベルとの直談判に、主任室を出て行く。

見習いの少年スマート(Ephraim Smart)がお茶のコップを抱えて登場。ジョージはただでお茶を貰おうとするが、少年は拒否する。カーとオボイルに会ったら昼休み会合の件を念押しするように、ラビーは少年に言付けるが、〈カトリックのオボイルにお茶を入れるような奴からはお茶は貰わない〉として、カーからは給仕契約を断われたことを告げる。カーがどう言おうともオボイルにお茶を出すようにラビーが指示するが、建造船舶に従事し、プロテスタント自警団に所属するある男から、要注意人物オボイルにお茶を注ぐようなら同類と見なして叩きのめす、と脅迫されたことを告白し、危険手当でも貰わない限り、カトリックには今後お茶を注がない、と語る。オボイルは見習いの募金には宗派の別なく進んで応じる寛大な人物だとラビーは論じ、ジョージも少年に腹を立てるが、彼は気にとめず、フォックス主任を仇名の〈人工衛星〉呼ばわりし、仕事をサボっていても小言ですむ、と豪語する。

そこへフォックス主任が戻る。昼休み前にお茶を出さないように注意し、自分が見習いの時代はお茶くみで週当たり一人2ペンス貰えれば大金持ち気分だった、と回想すると、現在最低でも3シリング¹⁰⁾稼いでいる少年は、大昔の石器時代の話ですね、と去って行く。

先ほどの〈カトリックにお茶を出すな〉の話をジョージが持ち出すが、ラビーは尾緒がつかないように配慮して、切り上げさせる。フォックスは、ベルに訓戒して話をつけたことをジョージに伝える。立ち去ろうとするジョージに、ラビーは昼休み会合参加を念押しするが、くだらないお喋りには付き合えない、と欠席を宣言して立ち去る。

昼休みでも工場内で組合集会は認めない、とするフォックスに、もちろん工場の裏手で開くとラビーは説明し、相談事を切り出す。それは、組合の役職にあるモーガン(Billy Morgan)が宗教上の理由で組合の脱退を考えており、とどまるように説得してほしい、という趣旨だったが、問題が現実には表沙汰にならない限りは動かない主義で、自分の職務は組合ではなく会社の利益を考慮することだ、として受け付けない。彼はロッカーから別のしゃれた山高帽を取り出し、昼食と午後の会議で3時まで不在にする旨をラビーに伝え、例の〈お茶酌み拒否事件〉のなりゆきを気にかけてつつ、立ち去る。

フォックスの外出を確認したバクスターが舞い戻る。職場内の組合会合は認めないくせに、昼休みの福音派の説教や賛美歌は黙認するフォックスの二重基準をラビーは批判し、フォックスの残した山高帽をかぶり、鏡に映る自分の姿を見る。昼食を急かすバクスターに、山高帽こそは権威の象徴であり、ジョージをはじめこれをかぶりたがっている者は多く、その昔にも同じように出世の野心を抱いていた連中がいたが、世界恐慌でその夢は挫折し、せつかく拵えた山高帽も自宅でしか、かぶる機

会がない始末だ、と回想し、ともに立ち去る。昼休みを告げるサイレンが鳴る。

第2場。作業場の外の空地。作業場からラビーとバクスターが登場。会合に備えて箱や板を半円形に並べる。お茶酌みの少年スマートが遅いのをラビーがこぼしていると、ようやく少年が現れる。給湯器に監視者がいて勤務時間には使えず遅れた、と弁明し、次のお茶酌み先へ駆けて行く。昼食はサンドウィッチの弁当で、ゴルゴンゾーラ・チーズ入りのバクスターのサンドウィッチをラビーは勝手に自分のと交換してぱくつく。突然、賛美歌の録音音楽が響き、〈動く伝道事務所〉(mobile mission hall[37])に乗って波止場へと向かう伝道情宣車が遠ざかり、ラビーはこうした「功利性のクリスチャン」(the utility ones [=Christians], [38])を批判する。

作業場から一人、男(Alfie)が出てきて、トランプ遊びに誘うが、会合を理由にラビーが断ると、不機嫌になって立ち去る。組合会合には金を積まれない限り絶対に顔を見せない、この手の恩知らずな連中を相手に職場委員として奉仕せねばならぬ苦勞を、ラビーはバクスターに話して聞かせ、この際とばかりに、バクスターの労働運動における信条を探り出そうとする。

というのは、年末に退職するブレイク(John Blake)の後任として、専従幹事職(週給16ポンド[39])にバクスターの名前が挙がっているからである。バクスターは、全組合員の福利のために身を粉にして働いた、デイヴィのような労働運動の殉教者になる意思は自分にはまったくない、実際に25年前の専従幹事選挙ではデイヴィは組合員から支持されずブレイクに敗れたのではないかと話す。ブレイクの勝因はプロテスタントの危機感に訴える卑劣な戦術を使ったからだ、とラビーが指摘すると、バクスターは、組合員の75%がプロテスタントである以上、デリー出身のカトリックの対立候補より、自分に票が投じられる可能性が高いこと、軟弱なおべっか使いの連中には、デイヴィのような清廉潔白な人格者は、尊敬どころか憎悪の対象となること、むしろデイヴィと真反対の姿勢をとり、歓心は買っても誰も信頼せず、如才なくふるまうつもりだ、と弁じたてる。ラビーは、労働条件の改善や組合の地位確立のために尽力した先達の辛酸に思いを馳せることもなく、成果だけをのうのうと享受しているバクスターに代表される若い世代を批判するが、懐古趣味の感傷に浸るのでなく、人間はそのときどきの出来事にしか関心のない刹那主義者だと現実的に認識すべきだと、バクスターは反論する。さらに、デイヴィに教わった労組の3要素である〈団結・寛容・忠誠〉は現実にはいまや瓦解しつつあり、その証拠にはモーガンの脱退を止められないほど〈団結〉力に欠け、カーとオボイルにいがみ合いをさせる〈寛容〉を示し、ジョージは隙あらば超勤違反して組合規則への〈忠誠〉を裏切っているのではないかと現状を指摘する。ラビーは、会議で専従幹事にバクスターの名前が挙がったら断固反対し、組合の存在意義を弁えている他の人材をさがす、と断言する。

カーが一番乗りで会合に姿を現し、デイヴィの召集した会合だから来たのであり、オレンジ会にも加入していないバクスターのような生焼けのプロテスタントがいるから、カトリックがのさばりはじめており、カトリックに手を貸すようなプロテスタントも同様に〈アルスターの敵〉とみなす、と威嚇する。バクスターはこれに切れて、こんな連中を相手にするのはうんざりだ、職場委員を辞任す

る、と大声で宣言する。

ちょうどそのとき、デイヴィ、続いてオボイルが登場。気まずい沈黙の中、会議が始まり、司会役のデイヴィがまず異例の非公式会合の開催を釈明し、(1920年代に組合分裂の危機を招いたように)正式会議で激論を交わすのではなく、内々にカーとオボイルに事情説明の場を持つことにしたのだと説明する。

まず、オボイルが、〈奴は共和主義者で非合法組織のメンバーであり、組合を共和主義で蝕んでいる〉という誹謗中傷をカーが職場中で自分に関して行っている、と主張し、カーは不規則発言でこれに応酬する。ラビーは両者を諫めて、20年前(1937年頃)、労働条件を巡る紛争の際、抗議行動として職場放棄をした勇気ある4人組が、他ならぬカーとオボイル、そしてデイヴィ、ラビーだった事実を思い起こさせ、20年を経て生じた同士間の亀裂を嘆く。しかし、カーとオボイルは立ち上がり睨み合い、激しい非難の応酬が続く。

デイヴィは次に、カーに抗弁の機会を与える。しかし、カーはオボイルに関する先述の内容——「特別権力法」¹¹⁾(Special Powers Act [49])による拘留もありえる犯罪的な内容——を確かに他人から耳にしたと主張するだけで、誰から聞いたのか、情報源は秘匿し——組合員(つまり従業員)である事実は明言するが——名前を挙げることは拒否する。この点は、オボイルも同様で、両者ともに噂を広めた張本人が誰であるかは、口を閉ざす。それまで穏やかだったデイヴィは、急に激昂して2人にここを立ち去れと、怒鳴りつける。(両者、静かに退場。)

事態の深刻さを憂うデイヴィとラビーに、バクスターは、組合内部には別の秘密組織「プロテスタント自警団」(Protestant Vigilance Group [51])が存在し、カトリックをつけあがらせず、解雇となればカトリックを対象にすることを意図する差別集団だ、と告発する。ラビーはこれに対して、カトリックも自分たちの縄張りでは同様であり、どっちもどっちだ、と反論する。結局、カーによる中傷事件は支部会議の表舞台に出さざるを得ない、とデイヴィは諦める。

デイヴィの弟ジョージは、この会合にはやはり姿を見せず、昨夜の支部委員会で超勤違反による5ポンドの罰金処分に決定したことを直接伝えることはできなかったものの、決定通知はラビーが自宅宛てに郵送を済ませており、これぐらいの威圧的手段でなければ効果はないだろう、とラビー。

遅れて、眼鏡をかけ、聖書を手にモーガンが登場。彼は、欠席予定の明晩の支部委員会に提出してほしいという封書をラビーに手渡し、その場で読み上げることを許可する。ラビーが朗読する文書は、組合脱退申請書で、「罪深く不敬な組織」である組合に留まることは信仰上の理由で耐えがたい旨が記されていた。しかし、組合は脱退するものの、扶養家族のあるモーガンに造船所を辞職する意思はなく、このまま勤務は続けるという。ラビーはこれを聞いて激昂し、もし宗教上の理由による組合脱退を一人でも黙認すれば、同様の理由を挙げる追随者が続出し、長年かけて確立した〈クローズド・ショップ〉制度の屋台骨を壊し、組合本部は伝道事務所になってしまう、組合を辞めるなら仕事も辞めるのが筋だ、と厳しく追及する。過去において、不倫や酒乱の男たちが、神の啓示を得たなど

と宗教上の理由を隠れ蓑にして組合を脱退した前例があるだけに、ラビーの剣幕は納まらないのだった。

組合活動に積極的に参加せず、ただ名目だけ組合員でいることもできるのでは、デイヴィは分別ある妥協案を示して諭すが、不信心者と共通の目的で団結してはならない、という聖書の一節を引用して、モーガンは拒否する。造船組合連合のお陰で週給10シリングの昇給が金曜日から実施されるが、組合が勝ち取ったこのベース・アップ分は受け取るのか、とのバクスターの問いには、その時になって決める、とモーガンは答えるのみ。デイヴィは、労働組合は、人件費を恣意的に削減しようとする雇用者の横暴から労働者を保護する、廉価で最良の保険なのだ、と説得するが、良心の命じることだから、と彼の脱退決意は揺るがない。やむをえず、デイヴィは申請書を地区委員会に届けることを了承し、モーガンはデイヴィを「公正な人」と賞賛して、立ち去る。

モーガンは就業規則を熟知しているはずだ、というラビーに、「規則は良心を支配できるだろうか」と、デイヴィは異議を挟む。昼休み終了のサイレンが鳴る。ラビー、バクスター、デイヴィの順に作業場へと退場する。

第3場。同日夕方のデイヴィの自宅。アイロンがけをしていた娘メアリアンは、遠くで爆発音を耳にして驚き、火掻き棒で壁を叩いて、隣家のマーサ(Martha White：ラビーの妻)に合図する。駆けつけたマーサは、造船所での爆発ではないかと心配するメアリアン(この日、バクスターは夜8時半まで残業し、デイヴィと組合の用事で8時40分に立ち寄る予定)に、心配しても始まらない、と忠告する。そして、町で会ったジョージの妻のネリー(Nellie Mitchell)が5ポンドの罰金の件で——彼女は夫宛ての郵便物を勝手に開封したのだった——夫とともにデイヴィの家に押しかけてくることを、あらかじめ知らせる。ジョージは兄の家を2年以上も訪れたことがなく、メアリアンはこの叔父夫婦を毛嫌いしている。揉め事の原因は宗教、と嘆く彼女に、宗教ではなく宗教を歪めてしまった人間のせい、とマーサは訂正する。良心を理由に組合を脱退するモーガンこそ、デイヴィの苦労に対して良心の呵責を感じるべきだし、モーガンの妻が紹介する会合では教義解釈が頻繁に行なわれてついていけないから、ラビーの言う〈雨後の筍信者〉('Mushroom Christians' [62])ではなく、自分は伝統ある英国国教会にとどまるつもりだ、と彼女は語る。かつて、ラビーが初めて職場委員に就任したとき、多くの陳情が寄せられたが、そうした煽動に乗せられて労使交渉に奮闘しても、肝心の連中はみな途中で脱落して、梯子をはずされてしまうのが落ちだ、と自覚していたという。

幼い頃(2歳)に母親を失ったメアリアンが亡き母親の思い出を尋ねると、歩き方や話し方や声まで生き写しだ、とマーサは答え、金目当てでジョージと結婚したようなネリーのような女には、「忠誠心」という言葉は〈夫への忠誠〉でなく、北アイルランド国境地帯での〈国家への忠誠〉という政治的な意味で理解されるだろう、と皮肉る¹²⁾。メアリアンが新婚後に引っ越す新居は、立地環境も良く、前後に庭付きの新築のセミ・デタッチドで、建築費から1割引きの1,350ポンドの価格で、20年ローンによる返済計画だという。こうした堅実な将来設計を聞いてマーサは喜ぶ。彼女がラビーと結

婚した当時は、ちょうど世界恐慌のさなかで、見習い期間を終えた直後にラビーは解雇され、週給と貯金の5ポンドを元手に^{つま}儉しい新婚生活が始まったのだった。その後3年間にわたりラビーは失業状態で、牧師や市議会議員から推薦状を貰って倉庫系の仕事の面接に行くと、同じような常套句を並べた推薦状を手にした応募者が40人もひしめいていたという。マーサとラビーは小学校の幼馴染で、若死にの家系の娘ということもあって、ラビーの両親、ことに母親は2人の結婚に反対だった。交際期間が8年目に入り、マーサは意を決して、結婚を前提とした交際なのか、我慢比べなのか、ラビーに迫ったという。息子から結婚の意志を聞いたラビーの母親は、それまでの反対の姿勢を捨てて、まるで英国女王が主宰するような壮麗な挙式を演出してくれたのだ。苦難な時期にそういう経験を積んだマーサだからこそ、〈安定してから結婚するのでは遅い〉、〈人生、心配したって始まらない〉、という腹の据わった忠告ができるのである。

医者に心臓病の処方箋を貰いに外出していたデイヴィが帰宅。組合関係の用事でラビーと相談したい、と言うので、マーサは火掻き棒で壁を叩いて合図する。ジョージ夫婦が訪問予定だと知ったデイヴィは、罰金処分の件だろうと推測する。ラビーがシャツ姿で登場。通りでジョージ夫婦の姿を目撃したらしく、自分にも責任がある件だと語る。

ツイードの上着に山高帽のジョージ、毛皮のコートに派手な帽子、傘を持ったネリーが登場。ジョージは罰金処分通知書を示し、緊急事態だから超勤するように指示され、従ったまでだ、と言い訳をするが、ジョージの働く現場は緊急事態に該当しないし、超勤制限に余裕のある他の従業員に依頼するのが筋であり、一時解雇者が全員雇用されて初めて超勤に応じるのが組合の方針だとラビーとデイヴィは指摘する。するとネリーは、組合のみせしめだと批判し、郊外の一戸建てとマイカーを維持するために超勤して稼ぐことの何が悪い、と憤慨する。デイヴィは説明を繰り返し、超勤制限の警告は既に職場委員から一度受けていたこと、組合員はみな平等に組合費を納入し、全員の雇用が守られるために規則が制定されたこと、それ以前は一部の者が超勤を独占する一方で、路頭に迷う失業者もいたこと、もし自分が失業者の身になれば保護を求めるはずだ、と説き聞かせる。しかし、ジョージは、自分が違反をした1週間後に、(禁止のはずの)超勤をしていた者がいたのはおかしい、と抗弁。デイヴィはこれに、違反の4日後に全員の雇用が実現したからであり、全員雇用状態なら好きなだけ超勤しても構わないのだ、と丁寧に解説する。組合の意向に関わらず自分は超勤するし、組合運動に没頭する兄を持たなければ今時分は副主任になっていたのに、と恨み言を洩らすジョージに、手当さえ出れば終戦記念の〈2分間黙祷¹³⁾〉の最中にも仕事をし、(ナチスの強制収容所があったドイツ北部の村)「ベルゼンのけだもの」(‘The Beast of Belsen’ [73])の渾名を貰っていたらどうよ、とラビーは罵る。独身時代は組合運動に熱心だったジョージの変貌を嘆くデイヴィに、妻のネリー自身が答えて曰く、労働組合(trade union)よりも婚姻結合(marriage union [73]=夫婦の絆)を重視するように夫を説得したのは自分であり、スラム育ちの辛い経験から、破滅した惨めな負け組にはなりたくない、と主張する。デイヴィは罰金の減額願を提案するが、ラビーは規則を盾に、減額願の前に

まず全額納入が前提であり、しかるのちに払戻しや減額が行なわれる、と解説。罰金支払いも嘆願書も出すつもりはないし、好きなだけ超勤する、と繰り返すジョージにラビーは堪忍袋を切り、殴りかかろうと威嚇する。ネリーは傘を持って夫を守り、マーサもこんな屑みたいな人のことで醜態を演じないで、と夫を宥める。

顔面蒼白の心配そうな表情で、超勤を終えたバクスターが登場。爆発事故で一人重傷者が出たこと、事故原因は不明だが、IRAの時限爆弾だという噂を流す者がいて職場中に一気に広まり、退勤時には暴徒がカトリック従業員を職場から追放する不穏な動きが始まり、ぐずぐずしていた一人が顔を殴られる事件が起きたのだ、と言う。弟夫婦との口論にうんざりしたデイヴィは、2人に出て行くように命令し、彼らはドアを乱暴に閉めて出て行く。バクスターは、カトリックのオボイルが明日、出勤するのを思いとどませねばならない、と告げる。なぜなら、二三日、休暇を取るようにオボイルに勧めたのが、他でもない喧嘩相手のカーであり、オボイルは今度もまたカーの陰謀工作に違いないと思込んで、意地でも出勤するだろうからである。デイヴィはフォックス主任に了解をとって、明日オボイルが出勤したら彼と勤務を共にして、説得することを提案するが、暴徒たちはカトリック狩りに血眼になり、昼休み時分には押しかけてくるだろう、とラビー。1920年代はじめ、同じようなカトリック排斥運動が造船所で起こり、船から海へ投げ込まれ、45m泳いで辿りついた対岸で待ち受けていた暴徒に凶器（ポルトや石、鋸）でリンチを受けてからというもの、憎悪と復讐心が染み込んでいるニュージェント（Jimmy Nugent）、極道連中に瀕死の重傷を負わされ、いまだに脚を引きずっているオウエンズ（Bobby Owens）——この被害者2人の実例を挙げる。デイヴィは、「プロテスタントでもカトリックでも暴徒に教養などない。連中は頑迷な考えを長い間溜め込んで、暴力の形で一気に吐き出すのだ。」と語る。気味の悪い沈黙の後幕。

第2部。第1場。翌朝の主任室。図面台で作業中のラビーが、かかってきた電話に対応すると、ちょうどフォックスが入室し、バンクスからの電話を受ける。オボイルを除くカトリック従業員全員が欠勤のため、フォックスの部署は30人の欠員が生じて支障を来していること、バンクスから12人の人員要請に午後から6人を派遣するのがぎりぎりの線であることを伝える。早速彼は、若手中心に5人の派遣者を決定するが、モーガンを6人目の候補にすることにはラビーは反対する。なぜなら、彼の組合脱退申請は今夜の支部会議で受理され、明朝8時をもってモーガンは組合員資格を喪失し、非組合員となった彼が明日以降、出勤すれば、プロテスタント従業員は一斉に職場放棄ストを打つのは必至だからである。主任にはこの件は初耳だったと知り、職場委員をさしおいて越権行為的に報告した手続き上のミスをラビーは詫び、バクスターを呼ぶ。現れたバクスターによれば、モーガンと最後の話し合いのために報告を敢えて遅らせたが、結局徒労に終わったという。フォックスは、カトリック排斥の暴徒たちを阻止し、事態を收拾してカトリックを保護するのが組合の任務だ、と訴える。

モーガンがバクスターに連れられて登場する。モーガンが主任室に呼ばれるのは、かつて勤務時間内の組合活動に対する訓告以来である。宗教上の理由による組合脱退に固執するモーガンに、円満な

労使関係の維持のためには解雇せざるを得ないこと、組合を敵に回して闘うのは極楽トンボである、とフォックスは説得するが、モーガンの決意は変わらない。フォックスは解雇手続きをとり、30年来の部下に別れを告げる。

続いてラビーは、フォックスに、超勤違反のジョージが罰金5ポンドを納入しなければ、組合費滞納分に加算され、総額が18週分を越えるため、34条2項の規定により組合員資格を喪失し、モーガン同様に明朝、除籍されてしまう、と伝える。再加入の手続きには、38条4項の規定で入会金に罰金が追加されることになっており、あくまで罰金支払いを拒むなら再加入も不可能であることをラビーは補足説明する。

ジョージがバクスターに連れられて登場。喫緊の業務のため1、2時間制限枠を越えただけ、と弁明するジョージだが、実際は8時間オーバーであり、組合規則違反の行為を命じたと、上司から叱責されるし、このまま罰金未払いなら解雇せざるを得ない、とフォックスは迫る。ジョージは主任に迷惑をかけないために、今晚7時半の罰金支払いに応じる。

ラビーは改まった口調で2件の人事問題への主任の協力に感謝する。モーガンの欠員補充としての後釜をフォックスはラビーに命じ、労使の板ばさみとなって苦勞の多い中間管理職的な主任職に愚痴をこぼす。ラビーは、解雇されたモーガンについて、宗教観は異なるが、立場が変われば一理あるのかも、と理解を示す。ラビーは退室し、フォックスは身繕いする。

再びラビーが、カーを伴って登場。昼食間近なフォックスは機嫌を損ねるが、カーの話では、暴徒たちがオボイルを追い出しに昼食時に押しかける計画を練っている、という。

続いてデイヴィ、ジョージ、バクスターの3人が不安な表情で登場。三々五々、こちらへ人々が向かうなど、まるで「魔女狩り」(witch hunt [94])を髣髴とさせる不穏な空気が漂っており、オボイルのことを聞かれて黙っていたカーは、押されて、どっちの味方なんだ、と凄まれたらしい。作業台に立って窓の外を見たバクスターは、100人近い群集が押し寄せている、と報告。安全確保のため、デイヴィはオボイルを連れに行き、戻ってくる。オボイルは、暴徒たちは無言で自分を睨みつけていた、と怯えて語る。午後オボイルが勤務を続行するかを連中は注視しており、始業再開の1時10分が判断の目途になるだろう、とデイヴィ。いまずぐ撤退しなければ警察に通報する、と早まるフォックスに、自重を促すラビーとデイヴィ。オボイルの話では、リーダーは濃紺のつなぎに灰色の軽い上着に縞帽子で、同じ部署の従業員ではないが、昨日すぐ近くで仕事をして、非常に言葉巧みな聡明な人物に思えたという。

暴徒との話し合いに出て戻ってきたフォックスによれば、やすりや鎖を手に険悪な表情の連中もいて、一触即発の危険な状態であり、彼は警察への通報を決意する。しかし、すでに電話線が切断されてつながらない。デイヴィは単身で、リーダーの男と直談判に出て行く。バクスターの実況によれば、暴徒たちは道を空けようともせず、怒号を上げて彼を取り囲んでいたが、リーダーの鶴の一声で静まり、2人は1対1の対話を行なっている、という。

戻ってきたデイヴィは、もしオボイルが1時10分に職場を退去すれば、危害は加えないこと、退去の同行者はデイヴィに限ること、という約束を取りつけ、他に方法はないだろうと告げる。オボイルはこの提案に顔を両手に埋めて泣き始め、絶対に退去しない、と戸外の暴徒たちに向かって逆上して叫び、彼らが待ち受ける戸外へ飛び出そうとする。ラビーとデイヴィは彼を押しとどめ、錯乱状態を鎮めるためにデイヴィは彼の顔面を殴る。オボイルの叫び声を聞いた暴徒たちが主任室へ接近し始める。デイヴィが再び外へ飛び出し、すぐに戻る。オボイルと差しで話がしたい、という暴徒のリーダーの申し出をデイヴィは伝え、危険人物だから決して挑発せぬように忠告して、オボイル以外の者はみな別のドアから一時的に主任室を離れる。

リーダーの男がタバコを吹かしつつ登場。腹心2人が入り口を固める。男は、昨晚の爆発で重傷を負った、妻子あるプロテスタント従業員が病院へ搬送中に死亡したこと、オボイルや彼の父親は非法組織メンバーだとの情報を得ていること、午後の操業開始までの残り8分間におとなしく職場を立ち去るように、要求する。オボイルは、男の面が割れた以上、なにか事件が起きれば責任を追及する、と反論し、またヒステリー状態になって男に飛びかかろうとするが、腹心たちに阻止される。泣きじゃくり、オボイルが男に向かって投げつけた金槌は、ドア上の半円形採光窓(fanlight)を直撃してガラスを割る。別室に待機していたフォックスら6人がその音を聞いて駆け込んでくる。リーダーと腹心たちは最後通牒を言い渡して立ち去る。

オボイルは、あらぬ噂を造船所に流したカーを非難するが、フォックスは異常事態を知らせにきたカーを庇う。ガラスの割れる音、5分後には押し入るぞ、という暴徒たちの声が高まる。家族のことも考えて二三日仕事を休め、とバクスターが怒ると、オボイルは午後からも職場に戻って仕事を続ける、と宣言し、一同は啞然とする。バクスターとラビーは愛想を尽かして立ち去りかけるが、今度はデイヴィまでが、自分もオボイルと仕事を続ける、それが同士の組合員としての義務である、と主張し、みなは驚嘆する。懸命に説得を試みるものの、威嚇を受けずに働くという当然の権利を訴えるオボイルをいま見捨てるなら、それは自分のこれまでの労働活動や信念を全否定することになる、とデイヴィは譲らない。

作業開始のサイレンが鳴り始め、オボイルとデイヴィは退出する。バクスターが作業台上って、粛々と作業にかかる二人に暴徒たちが近づいた、と知らせた後、彼は悲鳴を上げて倒れこみ、嗚咽し、ドアから飛び出そうとするのを押しとどめられる。

暴徒たちが立ち去り、静まったあと、ラビーとジョージが飛び出し、戻ってくる。主任は自分の車でデイヴィを救急病院へ連れて行くように、バクスターに指示し、誰の身にも起こりかねないことだ、と立ち去る。カーだけがその場に残り、造船所からいつもと変わらない作業音が聞こえてきて、ゆっくりと幕が下りる。

第2場。2日後、デイヴィの自宅の台所で告别式が営まれている。[おそらく彼は即死ではなく、昨日あたりに他界したものと思われる。暴行傷害あるいは、テキストで暗示されるように、暴行が持

病の心臓疾患を引き起こしたのだろう。] デイヴィの棺は別室に安置され、喪服姿のメアリアン、マーサが弔問客に應對している。パブに逃げ込んだバクスターを呼び戻すように、ラビーはジョージに声をかける。バクスターや故人について非難がましいことを言うネリーにラビーは苛つく。徒弟一同代表の花輪を届けた見習いのスマートが弔問に訪れ、オボイルが依然、重篤であること、デイヴィの告別式のために造船所全体が午後臨時休業措置をとったことを伝える。フォックス主任が来訪。ネリーが追従口を並べていると、ジョージが一人で戻り、バクスターは言うことを聞かなかった、と伝える。フォックスはメアリアンに丁重に弔意を述べ、ラビーの問いに答えて、デイヴィを暴行致死させた犯人は捕まっておらず、リーダーの男は事件時刻には現場におらず、オボイルへの脅迫の証拠も不十分である以上、事件関与を立証できない、と告げる。メアリアンは、組合運動が原因で1年以上もフォックスによって失業させられた父親が台所で悔し涙を涙していたこと、イングランドに出稼ぎに行った父親の帰りを待ち侘び、自分も毎晩泣いた子ども時代の回想を語るが、フォックスは、有効求人倍率が低い以上、雇用者側は組合のことを心配せずすむ権力がある、と木で鼻をくくったような受け答えをする。

バクスターが酩酊して登場。無言で別室の亡骸と永訣の対面を終えて戻ると、ラビーに激しくからむ。ジョージも加わって、暴徒の横暴を黙認しているラビーこそ組合役員の服務違反として罰金ものだ、と批判する。バクスターは、採用人事権を握る「食わせ者」(the wee tin god [118])のフォックスも含め、ここにいるみんながデイヴィの死に責任がある、と主張。激昂したラビーは、妻の制止を振り払い、バクスターの両肩をつかんで挑みかかる。バクスターはそれに対して、キリスト教徒たちが宗教の名のもとに暴徒と化す現実を嘆き、さらにいっそうおぞましいのは、デイヴィのリンチ事件のさなか、自分には無関係なことだ、と立ち去っていった多数の無責任な仲間たちがいたことだ、と涙ぐんで訴える。ラビーは彼を脇へ寄せ、英国国教会の牧師が静かに登場し、前へ進み出る。一同頭を垂れ、牧師は祈祷書を読み上げる。幕。

(IV) 戯曲主題解題

次に、この作品の主題や問題点などをいくつかの項目に分けて考察してみたい。

(1) 集団・組織と個人の関係

自分の属する集団と個人がどのような関係を切り結び、どのような態度で臨むべきか、という主題は、時代を超えて成立する、大きな社会的主題である。個人と集団の関係のあり方は、デイヴィとジョージの兄弟に対比的に描かれている。

デイヴィは、「人々の幸福と組合のことを深く気にかかけ」(23, ラビー)「みんなの幸福のために自分を犠牲にした」(40, バクスター) 労働運動の闘士である。労働条件の改善、組合存在の正当な認知と尊敬を勝ち取るために長年にわたり奮闘してきたデイヴィは、たとえわが身を犠牲にしても集団の利益拡大に献身を惜しまない。だが、それ

にも関わらず、正当な報いを受けるどころか、いまでは「疲弊し打ち砕かれた病人」(40)と化したのは、彼の掲げる信条や理念があまりに高潔すぎて、一般の組合員からは煙たがられ、疎んじられたからである。しかし、彼が文字通り生命を賭けて守り抜こうとしたのは、組合運動の大義であり、集団としての組合の原理・原則であった。

一方、弟ジョージは、独身時代は組合活動に従事していたが、ネリーとの結婚後は尻に敷かれて言いなりになり、組合の定める超勤制限規定違反を承知のうえで、残業要請に応じている。「他人の世話は焼かない」(I'm not holding the baby for anybody. [28])と断言して憚らない彼に、労働者全体の利益擁護の視点はほとんどなく、〈自らの労働力提供で自らの報酬を増やすことのどこがいけないのか〉、とむしろ憤慨している、いわば個人主義の確信犯である。超勤に応じて上司の受けを良くすれば、将来の出世にもつながるとの思惑から、主任に対しては卑屈な態度をとり、デイヴィやラビーの説得は拒絶する一方で、フォックスの指示には唯々諾々と応じ、罰金を納めることに同意する。「生まれてこのかた、人助けのために指一本動かしたこともなく、なんでも自分たちのため、手に入るものは何でもつかんで離さない」(70)と、日ごろはおとなしいメアリアンからも、ジョージ夫婦の個人主義的な生き方や権力追従姿勢は厳しく糾弾されている。

働く意欲と技能がある者が進んで労働に励むことは、資本主義や個人主義の観点からは正当な営みであろう。問題は 個人の利害が集団や組織全体の利害と対立する場合である。

ジョージが残業することで、他の離職者は雇用の機会をその分だけ奪われてしまうことになる。雇用を広く充足させる観点から、たとえばワーク・シェアリングを実施して、労働機会を均等に分配する試みがこんにちでは提案されている。一方で、弱肉強食、適者生存こそが生物界の掟であり、限られたポストを目指す競争が公平に行なわれているなら、その勝者を批判することはできない、という考え方もあるだろう。ジョージやネリーは確かに独善的な人物として否定的に描かれているが、怠惰で非能率的な人々——「失業保険で暮らすことに満足している怠け犬ども」(71)——よりは、たしかに勤勉の美德を備えており、彼らの生き方を邪道とあながち決めつけることもできない。見習い少年にただのお茶をねだり、オレンジ会を会費未納で除籍(31)になるようなジョージの吝嗇も、郊外の一軒家と自家用車の出費を賄わねばならないローン地獄の彼の身になれば、やむを得ないことだとも言えるからである。

フォックス主任も、立場上当然ながら、企業という組織を重んじる人物である。彼は〈人工衛星〉さながら、職場を90分おきに定期巡回(31)して作業の進展状況を監視し、「チーム・ワークの大切さを固く信じ」、「めいめいが一肌脱いで懸命に頑張っ

そ、仕事は成し遂げられる」(24)と考えている。彼は、「経営陣の了承なしに追加新規採用する権限は持ち合わせておらず、私にも多くの上司がいる」(25)とか、「主任の周りにも誰か〔組合が組合員を防護するような〕防護壁を築いてくれないものかねえ」(91)と嘆息し、「主任職も、いいことづくめではないんだよ、ラビー。成果を追求する経営者と、最高のわが部下まで追放させようとする組合との間で、どっちに動いても誰かを怒らせてしまうんだからね」(93)と、中間管理職の板挟みの弱い立場をしきりに強調し、組合が相互に利害衝突して管轄争議が発生する事態を怖れて、夢のなかでもうなされる(27)と訴えている。(もっとも、組合(union)でありながら互いに団結(union)できない不合理な現状を皮肉ることも忘れていないが。)

彼は組合の存在自体には一定の理解を示し、組合書記を務める古参のラビーの相談相手となって案件の処理に協力姿勢を見せているが、「組合の利益ではなく会社の利益の追求のために私は雇われている」(34)として、決して立場や権限の枠を踏み出そうとはしないし、問題が顕在化するまでは対応措置をとらない主義(33)だとも公言している。企業組織に立脚するフォックスの事務的な非情さは、最後の第2幕第2場で露わになる。彼は溢れかえる失業者に僅かな仕事を与える権限、いわば生殺与奪の権限を持ち、労働運動の活動家だったデイヴィを意図的に失職させてきた事実を堂々と認め、なんら恥じるところが無い。彼にとっては、企業組織に不和をもたらす者は悪であり、組織の防衛と存続に障害となる特定の個人を切り捨てることは善なのである。

ラビーもまた、組合という組織を重視し、規則を金科玉条とみなす「規則第一主義者」(ruletarian [43])という点では、個人の自由意思を軽視している。営利栄達の道をとっくに諦め、勤務時間中に賭け事(サッカー籤)に夢中になっているラビーは、バクスターの目には「お喋りと賛美歌とサッカー籤とガツガツ喰い以外、骨身を惜しんで働いている風には見えない」(24)。第1幕第1場の最後に、彼が主任の山高帽を拝借して鏡に自分の姿を映すとき、もしかしたら、〈この帽子をかぶりたがっていた大勢の野心家たち〉のなかに、ラビー自身もかつては属していたのではないか、という疑念が頭をよぎる。ラビーの拠り所である組合の〈規定集〉は、彼が嫌悪を抱く福音主義者たちやモーガンの〈聖書〉と同様の教条的な役割を果たしていることに彼は気づいていないかのようである。

デイヴィやラビーらの住居は、デイヴィ自身が「貧民窟」('the slums' [67])と称しているように、労働者向けの安普請の長屋と想像される。用事があるときは電話や戸別訪問でなく、仕切り壁を火搔き棒でドンドンと叩くことで相手が駆けつける取り決めになっている。葬儀の際にも弔問客の控え室は台所であり、おそらく他に適当な空き部屋もない窮屈な間取りなのだろうと推測される。貧困生活といえばその通りなの

だが、太い相互扶助の絆がこの労働者長屋の住人の間にしっかりと結ばれ、貧しさを恬として恥じない逞しさが印象的である。同じ時期（昭和30年代）のわが国でも、醤油や味噌をお隣さんに借りにいく近所付き合いは決して珍しくなかったはずである。

〈集団と個人〉、あるいは〈全体と部分〉の問題を考えるうえで示唆に富むのは、メアリアンの思い出話を通して語られるデイヴィの以下のような言葉である。

「父さんがいつも私に言ってたけど、ベルファーストのすべての人生模様は造船所のなかに見つけられるんですって。」(61)とメアリアンは回想する。〈造船所はベルファーストの人生の縮図である〉という趣旨のこの表現は、いささか汎用性がありすぎて、〈〇〇は人生の縮図だ〉の空所に適する語はいくらでも思いつくだろうが、ベルファーストという都市の典型的な特徴を体現している（あるいは、体現していた）のが、タイタニック号を建造したこの街の造船所であることは確かである。

別の回想でメアリアンは「幼いころ、父さんがよく聞かせてくれた話と人間を比べることがあるわ。造船所でどんな風に船を造るか、竜骨板から始まり、しっかりした構造になるように板金を鋸締めや溶接をして船を造り上げる方法、船を結合させる各部分の圧力やひずみを絶えず念頭においておく、っていう話。そして、船が完成すると、ベルファースト湾から大海原へと乗り出し、暴風雨に打ちのめされ、弄ばれることになる。でも、父さんはいつも言ってたわ、ひとつ確かなことは、その船はまったく無傷でその試練を乗り越えるだろう、って。人間がそういう具合にいかないのは、マーサ、残念なことじゃない？」(63)と語っている。

巨大船舶の建造には個々の部品の揺るぎない接合と、それを担う作業員の全体を見据えた協調が必要である。他の自動車や電気製品でもそうだろうが、造船には個々人の協同連携作業が欠かせない。逆に言えば、もっとも団結や協同が要求される職種に従事する人間であれば、互いに不信や敵意を抱いたり、無関心な状態でいられるはずがないのだ。デイヴィには、自分たちが苦勞して完璧に堅牢な造りで仕上げた船は、絶対に沈むわけがない、という自信と誇りに満ちた職人魂があった。個人の労働が生かされ、集合体としての船舶に結実させる喜びがあった。造船所における組織と個人の葛藤は、これまではこのように昇華され、宗派對立や労働争議が起きるまでは、大きな問題とはならなかったのである。

最後に、中世の道徳劇『エヴリマン』(*Everyman*, ca. 1509-19)との比較を、テキスト編者のパーカーが行なっていることを指摘しておきたい。現存する印刷本道徳劇として最古で、オランダの『エレッケルライ』(*Elckerlijc*, ca. 1495)の翻訳と考えられ、921行からなるこの劇は、「抽象概念の〈万人〉〈死〉〈善行〉〈友情〉〈知識〉〈美〉などを登場人物とし、死の訪れと万人の心の動揺 神の顕示による救いをテーマ」¹⁴⁾として

おり、死を導き手に神より召還された万人の最後のお供をするのは、彼がそれまで無視してきた〈善行〉のみだった、という話である。友や親戚、知識や美は、結局は墓場や死後の世界へと持っていくことは叶わない。〈立派な行い〉のみが人間の救いの源であることを暗示するこの寓話的作品は、人生の最終段階で、〈個人〉としての人間の尊厳を説くものである。

(2) 労働組合運動

テキストを読解する際に困難を感じたのは、筆者がこれまで組合に加入した経験がなく、労働組合全般について無知であることに加えて、1955年～1960年頃（執筆から初演時期）のイギリス（特に北アイルランド）の労働組合の組織や機能について不案内だったためである。以下に記す内容は、いわば付け焼刃の勉強で筆者が調べて得た知識であり、専門家の目からは稚拙で未消化な記述であろうと覚悟している。

イギリスの労働組合で特徴的な制度であり、テキスト理解の鍵になるのは、①職場委員制度、②クロズド・ショップ、③当時の労働条件である。

① 職場委員制度について

まず、「職場委員」(shop steward)とはどういう存在であるのか、以下に3つの引用A～Cを掲げて、概念定義を確認しておこう。

引用A：「イギリスの労使関係の特徴づけるものとして、職場委員制度（ショップ・スチュワード制）がある。職場委員は工場・事業所等を単位として従業員の選挙により選出されるが、おおむね組合員の中から自分達の代表を選ぶことが慣行となっており、また一つの工場で組合が複数あり、各々が異なる労働者層を代表している場合には、各組合が各々の職場委員を選出するケースが多い。職場委員の主要な業務は、新組合員の獲得、組合員証の点検による組織状況の把握、組合費の徴収、組合員と組合との間の意思疎通等日常の活動の他に、労働条件の幅広い分野について職場代表者として経営者との団体交渉（多くは非公式）にあたり、産業別協約を補完するものとなっており、また時にはストライキ、残業拒否などの闘争を指導することもある。このように、職場委員の活動は組合運営に関して実態上重要な役割を担っている。」¹⁵⁾

引用B：「イギリスの労働運動では、むしろ職能別性格の強い全国産業別本部がつくられているので、一つの工場企業の組織は、全国的産業別組合の職場支部となつている。したがって一つの工場企業は、十も十五もの全国産業別組合の工場

企業支部によつてつくられている。そこで職場における組合員共通の問題については、どうしても一つの工場委員会のような組織が必要となる。この組織をショップ・スチュアードと呼んでいる。日本語で工場世話委員会とでもいうことが出来よう。…ショップ・スチュアードの委員は、それぞれ名目上の職場をもっているのであるが、事實は、ほとんどショップ・スチュアードの委員会の事務室にたむろして、いわゆる専従者としての事務をとつている。また、使用者と交渉して定時間がすぎれば、むろん、超過勤務の手当をもらっている。もし委員が必要と思えば、就業時間中に従業員を一堂に集めて説明し、あるいは協議をすることもあつたが、そのときもむろん支払われている。…今日では全くショップ・スチュアードは労働組合運動ではなくて、職場における生産活動の任務にとどまり、ショップ・スチュアードの横の代表者会議のような性質の運動は一つもみられないようである。」¹⁶⁾

引用C：「多くの職場委員は、一度選ばれると、その後の選挙で対立候補が立つこともなく職場委員を続けている。…職場委員にとって対立候補の立たない選挙は、信認投票として受け止められる。挑戦を受けた場合は、ただちに組合員の意見を確認することになるだろう。もし、対立候補が班内で一定の支持を得ていると考えたなら、自分がおりの方向に傾く。これらすべては、選挙の前に行なわれるのである。一般的に、職場委員が選挙で争うのは、対立候補が「どうしようもない奴」の場合か、他組合のメンバーである場合に限られる。」¹⁷⁾

テキストでは、若いバクスターがこの職場委員を勤めており、「上司からも仕事仲間からも一番に踏みつけにされる (public doormat number one)」(20) 哀れな役回りだ、と自嘲する一方で、「従業員の職場委員として、ある程度の敬意を受ける資格があるはずです」(25)と主任に反論している。これは、引用Cに示されるように、投票行為で選出された誇り高い身分であることと関係しているだろう。ただし、バクスターはまだ就任後間もないのか、組合関係の話題を職場内で主任に持ちかけ、ラビーからは「職場委員なのか、それとも職馬鹿委員なのか (a shop steward or just plain shop stupid)」(20) と、場を弁えない無思慮を槍玉に挙げられている。

組合員の中には「5割増し支給」(time and a half [38])でも貰わなければ組合集会に足を運ばないと思われる無関心層も多く、そうした連中をおんぶして世話を焼いたところで、最後には裏切られるのが落ちだ(38)、とラビーが語る時、若い頃に初めて職場委員を引き受けて苦労した彼自身の苦い経験が基になっているようだ。(このと

きの経験は、マーサの口から語られる [62].)

組合員の労働状況を把握し、たとえば、ジョージの超勤制限オーバーに警告を与える役目 (71) のほか、引用Aにあるように職場委員の「主要な業務」の一つに、「組合費の徴収」が挙げられる。勘定高いスマート少年を評して、「あの坊主は大きくなったら、立派な職場委員になりますぜ」(32)とラビーが舌を巻いているのは、少年がお茶代請求という集金活動のやり手であるからで、職場委員にはこうした地道な経理手腕も要求されていることがわかる。

しかしながら、もっとも基本的な職場委員の役目は、文字通り職場の代表として経営者側との交渉の窓口係を務め、組合の意向を雇用者に明確に伝えることである。ラビーが職場委員のバクスターを差しおいて、うっかり先に組合活動の報告をしてしまい、「労使双方で確認した手続き規則を破ったことを陳謝します」とか「組合のエチケットを私が破ったことを大目に見てください」(85)と、しきりに詫びるのは、労使交渉こそが職場委員の重要な専権事項であるとラビーが認識しているからに他ならない。

最後に、引用Bで触れられているイギリスの職能別組合の性格は、様々な組合が存在することから発生する管轄争議をめぐっての、ラビーの次の台詞から窺うことができる。

「われわれは意見の相違を認め合っているのです。しかし、みなが大きな労働組合運動の同胞だからといって、ただ懐^{ふところ}手を決め込んで、よその組合に出し抜かれなくちゃならん、ということにはなりませんぜ」(27)

② クローズド・ショップについて

次に、「クローズド・ショップ」についても定義の引用から始めよう。

引用A：「クローズド・ショップ (closed shop) = 文字どおり訳せば閉鎖工場。すなわち雇用機会をある組合の組合員にのみに制限する企業ないし工場をいう。つまり組合員であることを雇用の前提条件とし、逆にいえば非組合員を一切雇わないとするもので企業や工場における組合の地位をもっとも強く保障する協定である。この協定は、特定の労働市場において熟練労働力の供給独占を行ない得るほどに組織率の高い横断的職業別組合のみが締結し得るものである。これに対し、雇入れおよび雇用関係の維持について労働者の組合員資格の有無をまったく無関係とすること、すなわち使用者は雇用関係について組合の規制をまったく受けられないものをオープン・ショップ (open shop) (開放工場) という。」¹⁸⁾

引用B：A ‘closed shop’ means that only members of a particular union may be employed in the enterprise¹⁹⁾

組合脱退願を提出したモーガンに、ラビーは「組合の元役員として、非組合員資格では造船所で就労できないことは当然心得ているはずだ」(53)と指摘し、デイヴィも「非組合員資格で勤務する意思を君が押し通そうとするならば、数千人を巻き込むようなストライキを招きかねないのだがね？」(53)と論している。「非組合員資格で就労する自由を認めれば、造船所の奇人連中がこぞって主を自分の味方につけて組合から脱退しようとするだろう。長年にわたって、クローズド・ショップ実現のために闘ってきたというのに、何食わぬ顔で奴はここから出て行き、自分は手を引くんだ、とほざいている。」つまり、「組合に留まるか、仕事を辞めるかの、どっちかだ」(54)という二者択一を迫るのが、クローズド・ショップの本質的性格なのである。

テキストで問題となるのは、ビリー・モーガンが宗教上の理由で組合の脱退を希望し、かつ勤務の継続を主張した点である。モーガンは労働組合を‘ungodly assemblies’, ‘sinful blasphemous organisations’(53)と痛烈に批判し、『コリント人への第2の手紙』6章14節を引用(56)、不信心者との交際を禁止する言葉を脱退の根拠に挙げ、この国は‘a free country’(54)で、信仰の自由が保障されている国家のはずだ、と主張している。また、解雇を通告するフォックスに対しては、「幸いなるかな、正義ゆえに迫害されし者、天の王国は彼らのものである」というキリストの〈山上の垂訓〉の一節(『マタイによる福音書』5章10節)を引いて、この措置が不当な宗教迫害に当たるとの認識を突きつけている。このように、「信仰」と「組合」が相容れない場合、法的にはどのような対応がとられていたのだろうか。

「クローズド・ショップ協定」(closed shop agreement)と伝統的に呼ばれてきた協定は、1974年制定の「労働組合および労働関係法」(TULRA：Trade Union and Labour Relations Act)以降は、「組合員協定」(union membership agreement)と公式には呼ばれるようになったという²⁰⁾。

この法規において、1974年9月15日から76年3月25日の時期には、非組合員の解雇は適法としたうえで、「解雇された被雇用者は、宗教上の理由もしくは正当な理由で労組所属に反対であると示さない限りは、労働審判所の決定(industrial tribunal action)による補償金(compensatory payments)を得ることはできない。」としており、裏返せば、宗教上の理由による非組合員の解雇そのものは合法だが、補償金は支給されていたものと解される。76年3月以降、(研究書の刊行された79年までは)さらに条件が厳格化され、真に宗教的理由に基づく場合のみ、補償金が支給されることに

なり、原則として「組合からの脱退、組合員資格の消滅、組合からの除籍」の場合、解雇が合法とされている。一方、1978年の「雇用保護法」(EPCA: Employment Protection [Consolidation] Act) 58条b項では、「労組に所属することを宗教上の理由で真に反対する被雇用者は、通常の間解雇規則の手当(benefit of the ordinary unfair dismissal rules)を得る」と規定されている²¹⁾。

以上から推測されるのは、宗教上の理由による組合加入拒否は、70年代において補償金は支払われたにしても、解雇の理由として妥当であり、このテキストが舞台となっている1950年代末は、補償すらないという条件で解雇されていたようである。「妻と4人の子ども」を抱えたモーガンの退職後の行く末をフォックス主任が気遣うのも、この無補償解雇と関連すると思われる。

③ 初演当時の労働条件（賃金水準や労働時間）について

テキストには、賃金や労働時間への言及が具体的な数字で度々なされている。たとえば、バクスターがもし専従幹事に着任したら得るだろう報酬は「週16ポンド」である。また、ジョージが超勤違反で請求された罰金は「5ポンド」、メアリアンの新居は「1350ポンド」である。こうした額は、初演から半世紀近くが過ぎ、為替相場も物価も大幅に変動している現在、正確にはつかみにくい。ここではミッチェルの『イギリス歴史統計』から、関連する資料を抽出して、参考にしてみたい。

まず、イギリスの労働者で、職種が「造船および船舶工学」の男性の場合、平均週給は1959年は13.37ポンド、60年は14.39ポンド、61年は15.22ポンドである。これは全産業職種の平均が14.53ポンド(60年)であることを考えれば、ほぼ平均値であり、公務員などの行政職の10.88ポンド(60年)と比べれば随分恵まれている²²⁾。バクスターの専従幹事職の16ポンドは、従って意外に好待遇であることは明らかである。彼が新居として購入予定の住宅価格1350ポンドは、専従幹事職なら84.375週分、つまり約1年8ヶ月分の給料に相当し、20年ローン計画なら利子込みでも年間約100ポンド、月々10ポンド足らずの返済で可能であり、若夫婦の新居としては手頃で堅実な選択であるといえるだろう。また、ジョージが出し渋る罰金5ポンドは平均週給の3分の1、すなわち丸々2日分の給与に相当する大きな額であることが分かる。

ちなみに日本では、1959(昭和34)年の世帯当たり1ヶ月の実収入は36873円だったという。1957(昭和32)年に流行したフランク永井の『13,800円』という歌には、「嫁をもらおか 13,800円 ぜいたくいわなきゃ 食えるじゃないか」「一家だんらん 13,800円 笑って暮らせば 何とかなるさ」という歌詞があり、平均所得のたとえ3分の1でもなんとか生活はやっていけたことが窺われる²³⁾。

次に、労働時間について言及しよう。週当たりの労働時間に関しては、イギリスの全産業の平均が48.0時間（60年）であるのに対し、「造船および船舶工学」労働者は、47.4時間（59年）、46.6時間（60年）、46.2時間（61年）のように平均を下回っている²⁴⁾。1919年に工学造船連盟が週47時間労働を求めてストライキを行なったが、1960年以降、ほぼその要求は満たされている。

イギリスの超過勤務（残業）に関する統計資料は得られなかったが、テキストではジョージが月間制限枠の30時間を越える38時間就労し、なお残業に意欲を見せている。わが国でも、1939年～42年の三菱神戸造船所職員の平均残業時間は30時間前後であり、戦争の影響を受けた1938年には64時間、1944年には56時間という、大幅な平均残業期間を記録している²⁵⁾。

最後に、イギリスの登録組合数と組合員数の統計によれば、405組合・851万7千人（1955年）、400・854万9千（56年）、400・859万3千（57年）、401・840万5千（58年）、398・835万2千（59年）、398・853万2千（60年）と推移し、ほぼ〈400組合・850万人〉体制の規模に変化はなかったとされる²⁶⁾。

また、北アイルランドにおける男性の完全失業者数は、1955年から1960年の期間中、最大で2万9100人（58年）、最小で2万1700人（56年）と、これもさほど大きな変動は見られないものの、1958年が一時停職者数でも1000人と多く、不況がこの年はやや深刻だったことがわかる²⁷⁾。

(3) 宗派間の対立

北アイルランドのベルファーストでは、多数派のプロテスタント系住民による少数派のカトリック系住民の支配という構図が存在していた。舞台となる造船所においても、バクスターが「従業員の75%はプロテスタント」（40）と明言している。しかし、実際にはこの数字はもっと高かったのではないかと思われる。たとえば、ある研究書では、「造機・造船業における労働者の圧倒的部分はプロテスタントによって占められ、カトリックは特定の不熟練職種に限定されていた。職種別組合をプロテスタントが独占したために、カトリックは熟練職種に食い込むことが出来なかったのである。」²⁸⁾と記されている（下線は引用者）し、ネット配信のBBC News²⁹⁾によれば、「1992年の時点でもH&Wの従業員でカトリックの者は5%にすぎない」とし、和平プロセス段階で5%ということは、1960年にはもっと低かった可能性もある。（紛争前だから、逆にそうでもなかったかも知れないが。）同じBBC Newsは、H&W造船所労働者がプロテスタント寡占化した要因として、①もともと造船所の所在地が、市内東部のプロテスタント居住区だったこと、②造船には特殊な専門技術が要求されたこと、③当時の新規

採用が口コミに依存していたこと、を挙げている。

ラビーは、教会の中心的人物(‘great pillars in the church’ [65])だった両親の一人息子として生まれ、プロテスタントの信仰を守っている。婚礼の時、聖歌隊による『詩篇』23節の冒頭句「主はわが牧者なり」(66)の合唱で祝福された彼は、仕事でもよく賛美歌を口ずさんでいるようだ。(芝居の冒頭で歌っているのは、「妙なる道標しるべの光よ」[“Lead, Kindly Light”]という1833年6月13日、英国へ戻る船旅の際にJohn Henry Cardinal Newman [1801-90]が作った賛美歌³⁰⁾。)彼に言わせると、「賛美歌を歌うことが、わしの魂のかけらの奥底に触れるほぼ唯一のものだ。賛美歌斉唱は、愛の調和で人々の心を結びつける唯一の機会だ。そして『アーメン』の後で、またぞろ連中はいがみあうのだがね。」(21)

しかしながら、彼はプロテスタント右派の福音主義者やファンダメンタリストたちの狂信とは一線を画している。彼らの宗教は、「自分たちの宗教と違う宗教というだけの理由で、相手の腹に蹴りを入れたがらせるような宗教のこと」(22)であり、彼ら「聖書を熱烈に説く者たち(Bible thumpers)は、職場で集会を開き……昼休み中、好きなだけ喚きちらし歌を歌っては、トランプ遊びを楽しむ者たちの集中力を台無しにしている」(34)からである。

さしずめ、聖書を携えて現れるモーガンは、おそらくこの熱烈な福音主義者と思われるが、組合活動のみならず「映画、サッカーの試合、テレビ受信機、喫煙、飲酒」

(54)にいたる生活全般にわたって禁欲を信徒たちに要求する厳格な一派だと、ラビーは批判する。しかしながら、モーガンが彼なりに筋を通して失職と神の道を選択したあと、ラビーは以下のように、モーガンに対してある種の共感めいた感慨を洩らしている。「同士モーガンの天国観には同意しませんが、最後にはものごとは平等になるという考えに満足しています。……つまり、わしらがヨルダン川の反対側に行けば、モーガンはしっぺい返しをすることでしょうな」(93)。——北アイルランドのベルファーストでは迫害されて職を追われたモーガンだが、逆にラビーたちがヨルダン川を越え(てイスラエルに入)れば、モーガンのような熱烈な信仰者は普通の存在と見なされ、ラビーたちこそ迫害の憂き目に遭うだろう。運命的に生れ落ちた土地が、信仰受容の是非を大きく左右する、という趣旨と思われる発言である。

一方、プロテスタント強硬派の立場に次第に偏向してきたカーは、「進撃するカトリックの屑どもを敵に回して追い詰められた状態」を嘆き、「地区委員会でカトリックが役職につくことを断固として阻止する」と主張する。彼にとってカトリックの職場進出は共産主義の浸透と同様におぞましいものであり、そうしたカトリックに味方するプロテスタントは同罪であり、攻撃対象と見なす、と息巻く(45)。しかしながら、カーの場合は、教義や宗教上の理由でカトリックを批判しているというよりは、政治的

社会的理由でカトリックを敵視している感が強い。第1幕でオボイルをあれほど激しく非難していた彼が、真っ先に不穏な情勢を伝えにくる配慮を見せ、以後オボイルへの罵詈を慎むのは、自分の吹聴行為が及ぼした影響の深刻さを悟るとともに、オボイルへの彼の敵意がもともと、純粹に信仰上の対立であったのではなく、レットル張りされた「カトリック」という異なる集団への情緒的不快感やカトリックに職を奪われる個人的心配にすぎなかったからだとも言える。

マーサがいみじくも喝破するように、実際、ベルファーストで多くの揉め事を引き起こすのは「宗教ではなくて、宗教を今のような形にしてしまった人間たち」(61)という言葉の持つ意味は、深い。宗教本来の意図するところから逸脱した価値観が人々の考え方を歪めていることを、マーサは見抜いている。

この芝居では宗教的な頑迷固陋や偏狭が批判されている、とよく言われる。たしかに、男たちは〈意地になって〉〈強情を張り〉〈頑固一徹〉、一度言い出したらどんなことがあっても忠告に耳を貸さない。家族のことを配慮せず、生命の危険を承知で出勤したオボイルにしても、彼を擁護するか否かが、自分のこれまでの人生の軌跡を決定的に左右すると思ひ込むデイヴィにしても、よく言えば節操ある信念の人であり、悪く言えばただの石頭、頑固親父にすぎない。彼らを駆り立てる原動力が、はたして宗教的な性格をもつのか、人間としての尊厳や誠実さに関わる本能的な情念であるのか、筆者には判断がつかない。

(4) 世代間の溝

テキストでは登場人物の年齢は明示されていないが、断片情報をつなぐと大体の推測が可能である。最年長者はデイヴィで、「もうすぐ70の大台に乗る」(23)という台詞から69歳と想定される。日本ならとっくに定年退職の年齢だろうが、アメリカやドイツでは定年制自体が法律違反とされ、イギリスでも就労の意思があれば、年齢に関わりなく働くことができたものと推測される。このデイヴィ役は、1930年代に労働運動指導者として実在したデイヴィッド・スカボロ(David Scarborough)をモデルに作られたとされ、デイヴィを初演で演じたのは、劇作家としても有名なトメルティ(Joseph Tomelty, 1911-95)で、当時49歳。彼もまたH&W造船所で塗装工として働いた経験を持ち、映画『モービー・ディック』ではグレゴリー・ペックと共演している。

ラビーは世界恐慌(1929~31年)のさなかに見習い期間を修了[64]しており、見習い期間は13歳から20歳の7年間とされ(作者のトムソンも14歳で見習いになっていることは冒頭で触れた通り)、仮に1930年に20歳で修了とすれば、初演の1960年では50歳の設定となる。「大不況当時、ちょうどお前さんと同じくらいの年だった」(21)ラビーとバ

クスターの年齢差は（その台詞を信じるならば）30歳となり、バクスターは現在20歳となる。しかし、結婚を控え、職場委員を任せられるにはすこし若すぎるかも知れない。カーやオボイルは労働運動の同士であり、ラビーと同じ年の50前後であろうか。

このうち、世代間の対立が、もっとも鮮明で繰り返し浮き彫りになるのはラビーとバクスターにおいてである。

バクスターはラビーに向かって、「あんたたち古株は、とにかく、いつだって自分が正しいと思っている」（20）とか、「万一、弁慶の立ち往生となっても、自分の仕事や組合活動を実行するのがあんたたちの美德なんだ」（23）と、古い世代の独善や仕事中毒を批判する。勤務時間中でも監視の目をくぐりぬけてお茶酌みをしたと自慢するラビーに、「あんたの世代は、若い時分にどえらくたくさんの偉業を成し遂げたと言い張っているけれど、そんな話、誰に信じてもらえるかな」（36）と疑念を露わにする。

仕事中毒批判に対してはラビー側にもっともな抗弁の根拠がある。彼の若い時代は造船不況で極端な就職難にあり、「運良く仕事にありついているのに、病気で休むなんてのは犯罪だとみなされていた。デイヴィやわしはそんな流儀で育てられた」（23）からである。

世代間の溝はいつの時代にも存在し、年長者が若者に苦言を呈するのは世の慣わしではあろう。ラビーとバクスターのように、双方がお互いの言い分を言い合える人間関係が存在するだけでも、幸せなことだと言える。

(5) 流言の恐怖

この作品では、根も葉もない噂話、流言蜚語が、悲劇的結末を迎える原因となっている。バクスターが指摘するように、「こんなことが起こるまでは、ゴシップは無害で愉快なものだったのに、みんなが他人のセリフを断片的に伝えるから、こんな風に、暴徒たちが自分の考え方に都合のいいようにその断片をつなぎ合わせる破目になってしまったんだ。」（104）

事件の発端となる噂話を広めたカーは、昼休み会合の場で、「自分は聞かされたことをただ述べているだけ」（49）として、なんの吟味もなしに、単なる伝聞証拠を垂れ流している愚かさに反省の色すら示していない。もちろん、噂の張本人と目されるのは、群衆の指導者の男であり、「知的なタイプで——口が達者」（96）なこの男は、まことしやかな説得力と人心を掌握する術を備え、悪意ある嘘を人々の心の中に言葉巧みに吹き込んでしまったのだろう。

こうして、造船所の爆発はIRAの仕業〈かも知れない〉という憶測が、〈絶対そうに決まっている〉既成事実として広まり（IRAは原則として、非戦闘員は攻撃対象としないし、

民間人に被害が及ぶ場合は事前に、確認可能な暗号による予告電話をかけて避難を促すのが通例である)、プロテスタント従業員の反感や憎悪をますます募らせ、人々は躁状態の群集心理で鳥合の衆と化していく。なんら実体のない想像や思いつきが確固たる信念に変わってしまうのは、2つの宗派の人々の日常的な交流が乏しく、互いの無知が相手への恐怖を生むからである。

だが、こうした流言の悲劇が描かれるのはアイルランド演劇でトムソンが初めてではない。「催眠術にかかったように、次々と誤解し、噂にとびついて、まともに聞かず、説明の時間も与えず、一人として周りの現実を見ようともせず、…空な証拠に基づいて…かくも些細なことから、かくもありそうもない話…を作り、広め、信じこむ。」³¹⁾——これは、グレゴリー夫人(Lady Gregory, 1852-1932)の『噂の広まり』(*Spreading the News*, 1904)を評した、ある研究書の一節である。この『噂の広まり』を嚆矢に、同郷の先輩劇作家アーヴィン(St. John Ervine, 1883-1971)の『ボイド商店』(*Boyd's Shop*, 1936)でも、意図的な策略として嘘の情報をこっそりと流布させることが行なわれている。悪意ある匿名の暴力として、流言はアイルランド社会を蝕んでいる。まさしく「(個人的確執は)病気みたいなもので、伝染していく悪癖がある」(22)のである。

(6) 歴史的背景(造船不況とH&W, 映画『波止場』)について

A: 1950年代後半のイギリス造船不況の要因と実情

第2次大戦前の段階では、海運業界のランキングはイギリス、アメリカ、日本の順位であった。戦後壊滅的な痛手を受けたものの、1950年の朝鮮動乱による荷動きの増大は、日本海運に回生の機運をもたらし、1954年秋のヨーロッパ諸国の農業不作による穀物貿易の増大と冬の異常寒波による暖房用資源の輸入拡大、さらには1956年11月の第1次スエズ運河封鎖と相俟って、日本では空前の海運ブームが出現した。しかし1957年4月8日のスエズ運河再開により一挙に海運業は不況に転落し、その後まもなく世界海運は、船舶の大型化と専門化を主体とするハイペースの技術革新時代に突入、恒常的船腹(船舶隻数)過剰となり、以後いつ回復するとも知れない長い不況期を迎え³²⁾、1965(昭和40)年にはイギリスのフェアフィールド社が倒産するなど海運業の経営状態は極度に悪化したという³³⁾。1955年から57年にかけて執筆された『橋を越えて』では、3隻の建造中の船舶を抱えて当座の仕事には事欠かないものの、一方で50人の一時解雇者が出るなど、労働力は若干過剰気味だったことを窺わせることから、56年の海運ブーム終焉時期のほの暗い雰囲気も作品にも反映されている。

「1958年の各国別進水実績」のグラフ³⁴⁾を見ると、首位が日本、続いてドイツ、僅差

ながらイギリスは第3位に甘んじている。特に目を引くのが日独の場合には輸出船が約6割を占めるのに、イギリスは3割を切っている点である。テキストではフォックス主任が、「自分の職務にみなが緊急性や責任感を抱いてくれれば、ドイツ人や日本人に対して我々が立ち向かうのに大いに役立つことだろう」(24)と、日独に対抗意識を燃やす持論を述べている。

日本によってイギリス海運業が大戦後に打撃を受けたことを物語る一節が、ロック・グループのピンク・フロイド(Pink Floyd, 1965-)のアルバム『ファイナル・カット』³⁵⁾所収「戦後の夢」(the post war dream)の歌詞——「もしも 船造りの技術に優れた 日本人がいなかったら クライドの造船所は今でも繁栄していただろう(対訳 山本安見)」(if it wasn't for the Nips/ being so good at building ships/ the yards would still be open on the Clyde)——に見える。クライドはスコットランドのグラスゴウを流れる川の名前で、大戦後に日本海運の隆盛に負けて、グラスゴウの造船所が閉鎖されたことを物語っている。

B：ハーランド・アンド・ウルフ造船所の盛衰

作品のモデルとされるハーランド・アンド・ウルフ造船所は、「最盛期の第2次大戦中——この時期には軍艦や掃海艇を含む139隻を建造した——と戦後すぐの時期には3万5千人もの従業員がいた」³⁶⁾とされる。(わが国のトヨタ自動車の従業員は65346人、日産自動車は31389人であるから、日産自動車並みの規模を想像すればよい。ちなみに三井造船の従業員数は3918人、日立造船2103人、佐世保重工業1086人である³⁷⁾。)しかし、この従業員数は「2000年3月には1745人、2003年1月には121人にまで激減した。」³⁸⁾

1960年、H&W建造の最後の巡航定期船キャンベラ号以降、この世界的に有名な造船所の凋落が始まり、1966年に給与支払不能に陥ったH&Wは北アイルランド政府に補助金を要請し、以後30年以上にわたって総額10億ポンドの国税が私企業に投入され続けた。1975年に政府が接収したものの、1989年再び民間へ移行し、2000年3月、新しいクイーン・メアリー2世号の発注がフランスの造船所に依頼された時には、H&W造船所に絶望感が募った。そして2003年1月、H&WはAnvil Point号の建造を最後に造船の操業停止に踏み切り、1852年から続いた1世紀半の長い造船史に幕を降ろしたのだった³⁹⁾。『橋を越えて』でデイヴィやラビーたちが懸命に守り抜こうとした労働組合はおろか、造船所という労働の場そのものが消えてなくなった訳である。まさに隔世の感を禁じえない。

C：アメリカ映画『波止場』との比較

トムプソンが『橋を越えて』の執筆に着手したとされるのが1955年。その前年にはエリア・カザン(Elia Kazan, 1909-2003)監督の名作『波止場』(On the Waterfront, 1954)がアカデミー賞最優秀作品賞を含む8部門を受賞している。トムプソンが自らの造船所体験を基に戯曲を書いたことは間違いないが、『波止場』からなんらかの影響や着想を受けたことは想像に難くない。

『波止場』の労働者は、^{おきなかし}沖仲仕と呼ばれる、本船と^{はしけ}舳の間の荷物の上げ下ろしをする人夫たち、すなわち非熟練の肉体労働者が中心であり、熟練工からなる造船従事者以上に、雇用の機会は限られている。しかし、『橋を越えて』でも語られるように、大不況の時代にはベルファーストでも、『波止場』に描かれているような、大勢の労働者が僅かな数の仕事にありつこうと群れをなして集まる光景が波止場で繰り返されていたはずである。

また、『波止場』でも労働組合が大きな主題となる。ただし、『波止場』の組合幹部たちは、いわばヤクザ者の暴力集団であり、組合委員長を務めるジョニーは紛れもなくギャングのボスとして、組合費の名目で不当な^{みかじめ}見ケメ料を労働者から巻き上げている。そうした不正な実態を犯罪調査委員会で証言しようと決意する者は、事故にみせかけてビルの屋上から突き落とされたり、頭上から積荷を落とされたり、銃殺されたりする。つまり、『波止場』の組合とは、名前ばかりの組合で、むしろ労働者の権利を抑圧する悪の集団である点は、『橋を越えて』とはまったく異なる点である。しかし、兄を殺害されたテリー(もちろん、マーロン・ブランド [Marlon Brando, 1924-2004])が組合に不利な証言をして立ち上がった当初に、他の労働者仲間が秩序を乱す告発者に示す村八分の冷たい姿勢、ただひとりだけ仕事をあてがわれず無視されるテリーを無言で見つめる群集の冷淡さは、おそらくオボイルに対してプロテスタントの労働者たちが露わにした薄情な様子と共通するものがあるように思われる。たった一人でボスに立ち向かうテリーの姿は、自分の正義を確信した者だけが持つたくましさにあふれ、動機や立場こそ違え、オボイルやデイヴィの選んだ最後の道を彷彿とさせる。

『波止場』の最後はテリーの勝利と他の労働者仲間との融和という明るい結末であるが、『橋を越えて』には、標題とは裏腹に、そうした未来への展望がない。さらに、白黒作品で目立たないとはいえ、血糊のついた顔や袖、殴り合いの喧嘩の暴力場面がたびたび登場する『波止場』に対し、『橋を越えて』でのリンチ場面は、第三者(バクスター)の迫真の実況によってのみ語られるだけで、その惨たらしさは観客や読者の想像力や喚起力に委ねられている。(II)章の「上演までの経緯」で見たように、『橋を越えて』を上演中止にした理事会の判断は、とりわけ第2幕第1場終末の集団リンチ事件

の刺激性を配慮したためとされるが、その判断の当否は、ひとえに観客の側の鋭敏な感受性や想像力の有無にかかっている。『橋を越えて』では、舞台のうえでは一滴の血も流れない。夥しい血が流れるとすれば、それは観客の脳裏においてだけである。血腥い『波止場』を観たろうトムプソンが、あえてこの暴力不在の筋書き・演出技法を構築したのであれば、その試みはみごとに奏効していると思われる。(さらにいえば、『波止場』に見える、テリーとイディ [友人の妹の女子大生] のラブ・シーンや象徴的な役割を担う鳩も、トムプソンの芝居には相当するものがない。舞台が造船所ということも原因だろうが、愛玩小動物もいなければ、結婚間近のバクスターとメアリアンが愛を囁く場面すら描かれていないのだ。)

(7) 標題について

「橋を越えて」(over the bridge)という表現は、テキストのなかで1度だけ、メアリアンの次の回想の台詞(第2部第2場)に出てくる。——「フレイザー通り橋を毎朝眺めては、自分の父さんが幸運な人々のなかにはいないかしら、と待ってたわ。でも、もし皆が揃って現れたら、まだ職はないんだって分かった。もし自分の父さんがその輪のなかにはいなければ、嬉しくて小躍りして、母さんも喜んだ。つまり、再就職できたことだから。私は、人々の群れがだんだん小さくなり、とうとうある朝、たった一人の人だけが橋を越えてくる (only one man came over the bridge) のを眺めてた。そしたら、その人は私の父さんだった。」(115)——〈フレイザー通り橋〉は、論文末尾に補足資料として添えたベルファーストの地図で分かるように、造船所南側を迂回するシドナム・バイパス(Sydenham By-pass)に架かる細い跨線橋であり、造船所へ徒歩通勤する労働者が利用する橋である。(「バスに乗(って帰)れ」とオボイルが強要されるのは、造船所から遠いカトリック居住区の住人だからである。)縮尺1万5千分の1の地図⁴⁰⁾では省略され、1万2千分の1の地図⁴¹⁾でようやくその存在を確認できるほどの小さな橋である。つまり、いわば造船労働者専用の通勤路であり、来る日も来る日も仕事にありつけなかった父デイヴィはこの橋を渡って寂しく家路につくのである。トムプソンの生家があったモントローズ通りからこの橋までは直線距離にして600メートル。肉眼でぎりぎり歩行者の姿はとらえられる。メアリアンの語るこの挿話は劇作家の実体験に基づくものかも知れない。

しかしながら、編者のパーカーがテキスト序文で指摘するように、「橋はアルスターでは好んで使われる隠喩」(Bridges are a favourite Ulster metaphor.[7])であり、彼は「共同体に橋を架ける」とか(象徴的意味合いで)「橋を渡る」という表現を挙げている。トムプソンは、この作品がプロテスタントとカトリックの間や、老人と若者の

間、経営者と従業員の間、男と女の間などさまざまな隙間に「橋を架ける」ことに期待を寄せて、この標題を選んだのであろう。拙論冒頭で触れたように、トムプソンが市役所を解雇される原因となったのも、アルバート橋に塗装を施すため、川の水に膝まで浸かる過酷な立ち作業を塗装工全員が公平に輪番で行なうことを提案したからとされるが、これも橋にまつわる挿話であろう。

マクマヌス(Jack McManus)撮影のベルファースト労働者の出勤風景や町並みを写した数多くの印象的な白黒写真がテキストには挿入されている。とくに表紙に使われた1枚は、建造中の船舶に架けられたタラップのような橋を4人の男が手摺に捕まりながら歩く姿が撮られている。この写真での「橋を越えて」は、職場である船舶へ向かう労働者の日常を見事に切り取っている。

(8) 初演時の劇評について

入手できた初演時の新聞掲載の劇評について簡単に紹介しよう。1960年3月15日付け『アイリッシュ・タイムズ』紙では、劇評家K氏は2度この芝居のダブリン初演(オリムピア劇場)を見て、「ときおり、やはりこの芝居はややだれた進行を見せる。…しかし、〈アイルランドの生活の断面〉として提供される馬鹿げたことの大部分をはるかに越えたところにこの芝居を位置づける、誠実さと力強さがこの作品にはある」と賞賛し、オボイル役の俳優がヒステリーすぎることや辛辣さが足りないことを嘆きながらも、「昨夜の観客は芝居とその作者に対してこのうえなく熱烈な反響を示した」⁴²⁾と締め括っている。筆者も、たしかに第1幕は展開が緩慢で、お茶を注ぐの注がないのといった些事に拘泥する、まだるっこさをテキストを読みながら感じた。しかしながら、終盤になって話が急展開を見せ、良心や信念をめぐる葛藤が浮き彫りにされるにつれて、力強い秀作だという評価に変わっていったことを記しておきたい。

もう一つの劇評——これも厳密には再演かも知れないが、ロンドン初演(プリンシズ劇場)という解釈で扱おうと——同年5月5日付け『タイムズ』紙では、「第1幕は芝居というよりもドキュメンタリー」と一蹴し、「原則の議論にかくも独占的に関わる芝居は、無論、性格の点で弱くなりがちであり、困ったことには登場人物のほとんどが、歩く原則にすぎないということだ……原則が変化する場面で、その様々な体現者たちがその変化を担うだけの性格を備えていないのである。このことがときおり混乱を生み出している」と、主義主張の議論にとらわれがちな登場人物の欠陥を指摘したうえで、「とはいえ、この戯曲のドキュメンタリー的側面は、その明らかな不偏不党さに敬意を払わないではいられないし、劇的なクライマックスは期待に値する」⁴³⁾と結んでいる。北アイルランド造船所労働者の芝居を、ロンドンの批評家が、はたしてどれだけ

自分に関係するものとしてとらえられたか、疑問なしとしない論調であるように思われる。

(9) テキストの英語について

最後に簡単に、テキストの英語について記しておきたい。ベルファーストの造船所労働者が登場人物の芝居であるにも関わらず、統語や文体、発音面のいずれにおいても特に崩れた印象を筆者は受けなかった。もちろん、特徴的な点を挙げれば、‘ould’ (<‘old’), ‘Heth⁴⁴⁾’ [54] (<‘faith’), ‘hallians’ [37] (<‘hallions’<‘hellions’), ‘By jazes’ [38], ‘Bejazes’ [51] (<‘by Jesus’), ‘agin’ (<‘against’), 強調語としての ‘the hell’ の多用, ‘bate’ [75] (<‘beat’); ‘cratur’ [26], ‘cratur’s’ [76] (<‘creature’) に見られる, [i:] 音の [ei] 音への移行⁴⁵⁾など, 北アイルランド作家ならではの個性的な肉声が響いていたが, オケイシーのような綴り字の極端な崩れは少なく, 比較的読みやすい文章であったと思う。慣用表現が台詞にふんだんに盛り込まれ, 慣用的な会話 (idiomatic dialogue) そのものを批判する向きもあったらしい⁴⁶⁾が, 様々な会話表現を覚えられる点では, 良い語学教材でもあると感じた。

テキスト

Sam Thompson, *Over the Bridge* (Dublin : Gill and Macmillan, 1970).

○論文中の引用はすべて上記の版を使用し, 原著引用または邦訳引用の末尾に引用頁を括弧内に付記した。

—————, *Over the Bridge and Other Plays* (Belfast : Lagan Press, 1997)

[*The Evangelist, Cemented with Love*を収載]

注

- 1) エラスムス(大出晃 訳)『痴愚礼讃 附 マルティヌス・ドルピウス宛書簡』(慶應義塾大学出版会, 2004年), pp.52-53.
- 2) 誕生日の日付情報は, Henry Boylan, *A Dictionary of Irish Biography : Third Edition* (Dublin : Gill and Macmillan, 1998)による。復活祭蜂起が鎮圧され, 5月上旬に首謀者たちが次々と処刑され, 5月12日には最後の2名, コノリーとマクダーモットが処刑された。負傷して椅子に座ったまま銃殺されたコノリーの哀れさがアイルランド世論を急変させる転機となった。トムプソンが生まれたのはこうした激動の時代だった。
- 3) 本紀要21・25号で紹介した劇作家セント・ジョン・アーヴィン(St. John Ervine, 1883-1971)の出生地も奇遇にも, 同じバリーマキャレットである。
- 4) ‘elbowroom’は, 「ひじを自由に働かせる余地; 十分な空間; (活動 [思考] に十分な) 余裕, ゆとり, 余地」(『リーダーズ英和辞典』)の意味だが, アイルランドの詩人・劇作家ゴウガティ(Oliver St. John

- Gogarty, 1878-1957)の詩集に(標題詩を含む)*Elbow Room* (Dublin : Cuala Press, 1939)がある。“Elbow Room”のテキストについてはA. Norman Jeffares (ed.), *The Poems & Plays of Oliver St John Gogarty* (Gerrards Cross : Colin Smythe, 2001), p.180.を参照。
- 5) W.J.McCormack (ed.), *The Blackwell Companion to Modern Irish Culture* (Oxford : Blackwell, 1999), p.564.
 - 6) Belfast Telegraph紙の EamonnMcCannの追悼記事によれば、反体制作家ジョン・マガファン(John McGuffin, 1942-2002)は、当時北アイルランドのリベラルの英雄と見なされていたトムブソンを批判し、「『橋を越えて』の唯一の業績は、一握りの役立たずの中産階級に、劇場で一晩を過ごせた自己満足を味合わせたことだ」と激怒して語ったという。[http : www.irishresistancebooks.com/john.htm](http://www.irishresistancebooks.com/john.htm) [latest access date : 17/Nov/04]
 - 7) テキストの原語は‘head foreman’。造船所職工の職階について筆者は不案内であるが、以下の記述を参考に、〈主任〉という訳語をあてることにした。「その当時の職場は、いちばん上に工場長…それから、職長…それから工事の係員…がいたんです。工場長っていえば、よその会社ではそうとう上の人なんだそうですね。(函館ドックでは) 工場長の上に課長だとか部長だとかってあるのに、工場長っていう名前はふさわしくないって、後で主任——工場主任でなったわけです。」また、注記として「1958年(昭和33)年ごろに、工場長は工事主任となった。また、上記72年の機構改革にともない、工場主任は係長に、職長は作業長に、組長は班長と改称され、伍長の呼称は残った。」(『船の職場史』)
 - 8) 国も時代も違うので単純な比較にならないかも知れないが、1941(昭和16)年の川崎重工業株式会社艦船工場工員就業規則によると、モデル就業時間帯の一例として、午前7時30分始業、午後0時～0時30分昼休み休憩時間、午後4時終業、が挙げられており、昼休み休憩時間は造船各社を通じ30～40分が通例であった、という。(『昭和造船史 第1巻』, p.52.) 早朝から造船業は仕事を始めていたこと、昼休みが短かったことが分かる。このテキストでは、午後の就業再開は1時10分である。
 - 9) ‘demarcation’は「管轄、縄張り(所属組合の異なる労働者たちの組合別作業管掌区分)」(『リーダーズ英和辞典』)のことで、産業革命の機械化で半熟練・非熟練労働者が多数労働市場に登場し、熟練労働者の雇用不安や賃金水準・労働条件の低下を招く危険が生じたために、特定の職種や職業の熟練労働者が遂行すべき仕事の領域を確立したことを意味する。しかし、異なる組合が互いの「管轄」境界を尊重すれば問題は生じないが、新しい原料や材料、新しい生産方式などが登場すると、この境界線が曖昧となり、「管轄紛争」に発展した。(『労働組合読本』, pp.90-91.)
これと事情は若干異なるかもしれないが、ロバート・タウンゼンド(Robert Townsend)監督のアメリカ映画『ユニオン——名もなき男たちの鎮魂歌』(*The Union*, 2001)は、既存の白人の労働組合に対抗して黒人初の労働組合、「寝台車ポーター組合」(Brotherhood of Sleeping Car Porters)設立に向けて12年に及ぶ闘争を展開したランドルフ(A. Philip Randolph)の苦闘を描いている。組合は1937年8月25日に結成に漕ぎつけたが、このように新たな別の組合が成立すると、管轄をめぐる衝突が生まれる可能性は十分にあるだろう。
 - 10) 3シリングは3/20ポンド(=18/120ポンド)。フォックスが見習い時代に貰った2ペンスは2/240ポンド(=1/120ポンド)。つまり、インフレのせいもあるが、スマート少年はフォックス少年の18倍も稼いでいることになる。
 - 11) 正式には「行政当局法」(Civil Authorities Act), 俗称では「鞭打ち法案」(Flogging Bill)とも呼ばれる。治安維持のために、令状なしの逮捕、裁判なしの拘禁、鞭打ちの許容、審問検死の禁止、団体の解散、集会・出版の禁止などを内務大臣が実施できる内容で、1922年4月7日制定以来28年まで毎年更新され、33年以降は恒常的な法律となった。『橋を越えて』上演時を含む期間(1956年から62年)は、この法

- 律によって予防拘禁制度(internment)が導入されており、オボイルが怯えるように噂が原因で逮捕される可能性もあったことに留意したい。D.J.Hickey and J.E.Doherty, *A Dictionary of Irish History 1800-1980* (Dublin : Gill and Macmillan, 1989), p.70.を参照。
- 12) 北アイルランド紛争以前に上演された作品であるがゆえに、現在の状況から読むと別の意味でアイロニーになっている。すなわち、‘loyal’という単語は、70年代以降、主として‘loyal to the crown/Westminster’の意味で用いられ、英国との連合継続を主張する‘Loyalist’たちのキー・ワードとして、こちらの含意の方が一般的趨勢になる。同様に、テキストで「組合」「組合運動」の意味で使われている‘union’, ‘unionism’も今日では、英国との「連合」や「ユニオニズム」(‘Unionism’)の響きのほうが北アイルランドでは優勢であろう。
 - 13) イギリスでは両大戦の犠牲者を追悼して11月11日にもっとも近い日曜日(‘Remembrance Sunday’)の午前11時から2分間の黙祷を全国的に捧げるのが慣わしになっている。日本では黙祷は通例1分であるが、2分の方がじっくりと黙祷に耽るのに適するようにも思われる。
 - 14) 坂本和男, 来住正三(編)『イギリス・アメリカ演劇事典』(新水社, 1999年), p.61. (項目執筆者: 高杉玲子)
 - 15) 堀田芳朗『世界の労働組合 歴史と組織』(日本労働協会, 1986年), p.207.
 - 16) 高野 實『イギリス労働組合に学ぶ』(雄文堂, 1951年), pp.36-38.
 - 17) ヒュー・ベイノン(下田平 裕身 訳)『シヨップ・スチュワードの世界——英フォードの工場活動家伝説』(鹿砦社, 1980年), pp.262-263. (原著はHuw Beynon, *Working for Ford*, 1973)
 - 18) 白井泰四郎・花見 忠・^{こうしろかずよし}神代和欣『労働組合読本(第2版)』(東洋経済新報社, 1986年), pp.91-92.
 - 19) Nora Beloff, *Freedom under Foot : The Battle over the Closed Shop in British Journalism* (London: Maurice Temple Smith, 1976), p.7
 - 20) *Trade Unions — Law & Practice* (London : The New Commercial Publishing, 1979), p.181.
 - 21) *Ibid.*, p.181, p.183.
 - 22) B.R. ミッチェル『イギリス歴史統計』(原書房, 1995年), p.175.
 - 23) 市橋芳則『キャラメル値段 昭和30年代・10円玉で買ったもの』(河出書房新社, 2002年), pp.98-99.
 - 24) 『イギリス歴史統計』, p.147.
 - 25) 『昭和造船史 第1巻(戦前・戦時編)』, p.52.
 - 26) 『イギリス歴史統計』, p.140.
 - 27) 『イギリス歴史統計』, p.127.
 - 28) 松尾太郎『アイルランド——民族のロマンと反逆』(論創社, 1994年) p.85.
 - 29) Mairead O’Dwyer, ‘Religion an issue at yard’, 18 March, 2003.
http://bbc.co.uk/1/hi/northern_ireland/2861269.stm [latest access date : 9/Dec/04]
 - 30) John Henry Cardinal Newman, *Lead, Kindly Light* (Brewster, MA : Paraclete Press, 1987), p.184.
 - 31) 前波清一『劇作家グレゴリー夫人』(あぼろん社, 1988年), p.10.
 - 32) 織田政夫『海運業界』(教育社, 1991/94年), pp.55-58.
 - 33) 日本造船学会(編)『昭和造船史 第2巻(戦後編)』(原書房, 1973/79年), p.379.
 - 34) 謝敷宗登・堀川運平『造船』[〈日本の産業〉シリーズ8] (有斐閣, 1960/67年), p.209.
 - 35) Pink Floyd, *the final cut*, EMI Records (TOCP-67407)
 - 36) “End of an era’ at Belfast shipyard’, 17 January, 2003.
http://bbc.co.uk/1/hi/northern_ireland/2666765.stm [latest access date : 9/Dec/04]
 - 37) 数字はいずれも2004年3月現在の単独ベース(親会社のみ)で、『日経 会社情報 2004 夏号』(日本

経済新聞社)による。

- 38) “End of an era’ at Belfast shipyard’, 17 January, 2003.
- 39) ‘Yard’s decades of decline’, 21 September 2000.
http://bbc.co.uk/1/hi/northern_ireland/934145.stm [latest access date : 9/Dec/04]
- 40) *Colins Belfast Streetfinder Colour Map*, 2003.
- 41) *Belfast Street Map*, Ordnance Survey of Northern Ireland, 2003.
- 42) anon., “OVER THE BRIDGE” AT THE OLYMPIA’, *The Irish Times*, 15 March 1960.
- 43) anon., ‘Successful Climax to “Over the Bridge”’ *The Times*, May 5 1960, p.18.
- 44) ‘Heth’は、アルスターで耳にする驚きの感嘆詞であるという。Diarmaid O Muirthe, *A Glossary of Irish Slang and Unconventional Language* (Dublin : Gill & Macmillan, 2004), p.69.
- 45) たとえば, James Milroy, *Regional Accents of English : Belfast* (Belfast : Blackstaff Press, 1981), p.109.では, griefが [greif] と発音される例を挙げている。
- 46) Sam Hanna Bell, *The Theatre in Ulster* (Totowa, New Jersey : Rowman and Littlefield, 1972), p.92.

参考文献

- Bernice Schrank and William W. Demastes (eds.), *Irish Playwrights, 1880-1995 : A Research and Production Sourcebook* (Westport, CT : Greenwood Press, 1997)
- Hagal Mengel, *Sam Thompson and Modern Drama in Ulster* (Frankfurt am Main ; Bern ; New York: Verlag Peter Lang, 1986)
- Sam Hanna Bell, *The Theatre in Ulster* (Totowa, New Jersey : Rowman and Littlefield, 1972)
- Paddy Devlin, ‘First Bridge Too Far’, *Theatre Ireland* Vol.3 (June/September, 1983), pp.122-124.
- The Trade Union and Labour Relations (Amendment) Bill : The Right to Work The Right to Write* (London : Aims of Industry, n.d.)
- Nora Beloff, *Freedom under Foot : The Battle over the Closed Shop in British Journalism* (London : Maurice Temple Smith, 1976)
- Trade Unions : Public Goods or Public ‘Bads’ ?* (London : The Institute of Economic Affairs, 1978)
- John T. Addison and Claus Schnabel (eds.), *International Handbook of Trade Unions* (Cheltenham, UK: Edward Elgar, 2003)
- Trade Unions — Law & Practice* (London : The New Commercial Publishing, 1979)
- 日本造船学会 (編) 『昭和造船史 第1巻 (戦前・戦時編)』 (原書房, 1977/81年)
- 日本造船学会 (編) 『昭和造船史 第2巻 (戦後編)』 (原書房, 1973/79年)
- 大山信義 (編著) 『船の職場史——造船労働者の生活史と労使関係』 (御茶の水書房, 1988年)
- 高野 實 『イギリス労働組合に学ぶ』 (雄文堂, 1951年)
- ヒュー・ベイノン (下田平 裕身 訳) 『ショップ・スチュワードの世界——英フォードの工場活動家伝説』 (鹿砦社, 1980年) (原著はHuw Beynon, *Working for Ford*, 1973)
- 鎌田 慧 『労働現場——造船所で何が起ったか』 (岩波書店, 1980年)
- 織田政夫 『海運業界』 (教育社, 1991/94年)

訂正 本誌29号所収の拙論の記述を以下のように訂正します。

○37頁・下から5-6行目

(誤) 韓国や中国を訪問する…同様である。

(正) 韓国を訪問する…同様である。(天皇の訪中は、日中国交正常化20周年の1992年に実現済み。)

関連地図

Fraser Street Bridge
(造船所への通勤跨線橋)

Montrose Street
(劇作家トムソンが生まれた家)

